岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 161

旦山遺跡 2

岡山県北流通センター造成工事(南区域)に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 161

旦山遺跡 2

岡山県北流通センター造成工事(南区域)に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2001

岡山県教育委員会

序

本書には、真庭郡久世町中原地内に所在する旦山遺跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、岡山県北流通センター造成工事に伴う発掘調査であります。全体工事に伴う発掘調査につきましては、平成６年度から８年度にかけて実施し、その成果は平成11年３月に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』として刊行いたしました。その後、隣地において地滑り災害が発生する恐れが生じ、防災工事をすることとなりました。それに伴うこのたびの発掘調査は、その緊急性・危険性を鑑み、やむなく応急的な調査という形で対応せざるを得ませんでした。

とはいえ、様々な面での制約がありましたが、今回の調査では縄文時代の落とし穴、弥生時代の住居・土壙墓・袋状土壙・土壙などを検出し、北・東の丘陵上方への遺跡の広がりを確認することができました。とりわけ、北地点の丘陵頂部での土壙墓群の確認は、弥生時代後期における旦山遺跡の集落域と墓域の関係をとらえることができた点で貴重な成果といえます。

これらの成果を収めたこの報告書が、今後の調査研究、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究を深める資料として広く役立つよう念じてやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成に際しましては、久世町、久世町教育委員会、真庭地方振興局、岡山県商工労働部企業立地課、岡山県土地開発公社、ならびに地元の関係者各位からの温かい御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　　正岡　睦夫

例　言

1．本書は、真庭郡久世町大字中原地内における岡山県北流通センター造成工事（南区域）に伴い、岡山県教育委員会が岡山県商工労働部企業立地課から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した旦山遺跡の発掘調査報告書である。

2．岡山県北流通センター建設に係わる全体の調査については、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』1999年で報告している。

3．旦山遺跡は真庭郡久世町大字中原699-1ほかに所在する。

4．調査は、確認調査を福本　明が、立会調査を松本和男（岡山県教育庁文化課）・中野雅美・福本明・大橋雅也（岡山県教育庁文化課）・扇崎　由・佐藤寛介・米田克彦、池上　博（久世町教育委員会）が担当した。

5．調査期間は、確認調査が平成12年１月17日から１月28日まで、立会調査が平成12年２月28日から３月７日までである。

6．調査面積は、1550㎡である。

7．本書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて平成12年度に実施し、扇崎が担当した。執筆は松本・福本・扇崎が行い、編集は扇崎が担当した。
第２章については、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』「第２章」を一部修正のうえ再録した。

8．調査にあたっては、次の機関・諸氏から多大のご支援・ご協力を得た。記して厚くお礼申し上げる。
久世町、久世町教育委員会、県商工労働部企業立地課、県土地開発公社、岡山県真庭振興局、地元地権者の方々、調査作業に従事していただいた方々

9．遺物写真については江尻泰幸各氏の協力と援助を得た。

10．本遺跡の遺物・図面・写真は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　　例

1．本書に用いた高度は、標準海抜高度であり、方位は第１・２・４・35図は真北、他は磁北である。

2．第４図に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の１/25,000地形図「久世」を複製・加筆したものである。

3．遺構および遺物の実測図は基本的に次のように統一している。

　遺構：竪穴住居　１/60　　土壙墓・袋状土壙・土壙　１/30

　遺物：土器　１/４　　鉄器　１/２

4．本書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小片のため口径が不明確なものである。

5．遺物番号については、土器・石器・鉄器ごとに通し番号を付し、石器にはＳ鉄器にはＭの記号を付している。

本　文　目　次

序
例言
凡例
本文目次
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査・報告書作成の体制 …… 3
　第３節　調査の経過 …… 4
第２章　地理的・歴史的環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第３章　調査の概要 …… 11
　第１節　縄文時代の遺構 …… 11
　第２節　弥生時代以降の遺構と遺物 …… 14
　第３節　遺構に伴わない遺物 …… 26
第４章　まとめ …… 27
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（１/150,000） …… 1
第２図　トレンチ配置図（１/2,000） …… 4
第３図　確認調査遺構配置図（１/400） …… 5
第４図　周辺遺跡分布図（１/25,000） …… 8
第５図　遺構全体図（１/500） …… 12
第６図　土壙１（１/30） …… 13
第７図　土壙２（１/30） …… 13
第８図　土壙３（１/30） …… 13
第９図　土壙４（１/30） …… 13
第10図　竪穴住居１・２（１）（１/60） …… 14
第11図　竪穴住居１・２（２）（１/60） …… 15
第12図　竪穴住居１出土遺物（１/４） …… 15
第13図　北地点頂上付近全体図（１/150） …… 16
第14図　土壙墓１（１/30）・出土遺物（１/４） …… 17
第15図　土壙墓２（１/30）・出土遺物（１/４・１/２） …… 18
第16図　土壙墓３（１/30）・出土遺物（１/４） …… 19
第17図　土壙墓４（１/30）・出土遺物（１/４） …… 20
第18図　土壙墓５（１/30） …… 20
第19図　袋状土壙１（１/30）・出土遺物（１/４） …… 21
第20図　土壙５（１/30）・出土遺物（１/４） …… 22
第21図　土壙６（１/30）・出土遺物（１/４） …… 22
第22図　土壙７（１/30） …… 22
第23図　土壙８（１/30） …… 22
第24図　土壙９（１/30）・出土遺物（１/４） …… 23
第25図　土壙10（１/30） …… 23
第26図　土壙11（１/30） …… 23
第27図　土壙12（１/30） …… 24
第28図　土壙13（１/30） …… 24
第29図　土壙14（１/30） …… 24

第30図　土壙15（1/30）…… 24
第31図　土壙16（1/30）…… 25
第32図　土壙17（1/30）…… 25
第33図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）…… 25
第34図　遺構に伴わない遺物（1/4）…… 26
第35図　弥生時代遺構配置状況（1/1,500）…… 27

図　版　目　次

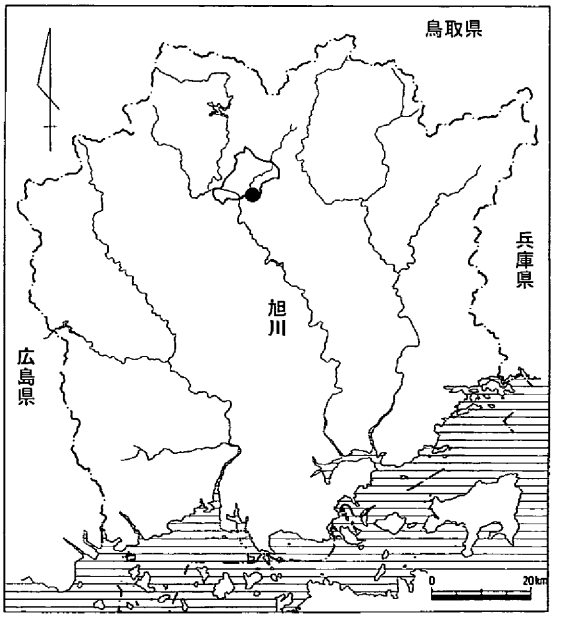
図版1　1．調査地遠景（西から）
2．調査区全景（南から）
3．土壙2（西から）
図版2　1．土壙4（西から）
2．竪穴住居1・2（西から）
3．土壙墓2（南から）
図版3　1．土壙墓3（南から）
2．袋状土壙1（西から）
3．土壙5（南から）
図版4　1．土壙9（南から）
2．土壙15（南から）
3．土壙16（西から）
図版5　1．土壙17（南から）
2．土壙18（北から）
3．土壙墓調査状況（東から）
図版6　1．竪穴住居調査状況（南から）
2．文化課の応援
3．雪の旦山遺跡（西から）
図版7　出土遺物（1）
図版8　出土遺物（2）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

岡山県真庭郡久世町と落合町にまたがって建設されている県北流通センターは完成間近となっている。このセンター建設に伴う発掘調査は、県商工労働部企業立地課の依頼を受けて、平成６年度から８年度にかけて実施し、平成９年度には発掘調査報告書の作成を行い、その成果はすでに『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』として刊行されている。

平成11年９月９日に久世町教育委員会から県文化課に次のような報告が入った。「久世町教育委員会に県商工労働部、県土地開発公社が来庁し、民地部分ではあるが旦山遺跡の北東側が崩れつつあるため、安全対策のため防災対策工事を緊急に現在の工事と一緒に実施したいというものであった。町教育委員会としては、遺跡の広がりについてはよくわからないが、県文化課と協議して欲しいと回答をした」という内容であった。同年９月16日に県商工労働部企業立地課流通団地整備班（以下、流通団地整備班）、県土地開発公社の担当者が状況説明と今後の対応について協議のため県文化課に来課した。協議の内容はおよそ次のような内容であった。「用地外ではあるが、旦山遺跡の北東部約4000平方メートルが地滑りのため、崩れつつある。近くには民家があり、学童通学路が通っているため、団地造成上、地滑りをそのまま放置することは出来ないので、地滑り箇所を切り下げたい。しかしながら、旦山遺跡の一部が残存しているため、早急に調査を実施して欲しい」というものであった。県文化課としても、事の重大性を考慮して、早急に確認調査を実施して調査の必要性を判断したい旨を伝え、切り下げ予定地内の伐採を行うよう協力を求めた。その後、流通団地整備班、県土地開発公社では地滑り工事のための交渉を地元地権者と開始する。県文化課においても今後の調査について県古代吉備文化財センターと具体的な協議を行った。９月27日には流通団地整備班、県土地開発公社、県古代吉備文化財センター、県文化課の四者が現地において地滑り状況の説明を受けた後、確認調査及びその後の対応、経費等について協議した。10月５日には経費について再協議をする。その後、流通団地整備班では立木補償を含む調整を地権者としていたが、その間も地滑りは少しずつ進行している状況であった。12月15日には前述した四者以外にも地元の久世町産業振興課、同町教育委員会も加わり（以下、六者会議と呼ぶ）確認調査について協議を行った。この会議において、地元調整も目途がつき、伐採も３～４日程度で終了できることが判明したため、確認調査を平成



第１図　調査地位置図（１/150,000）

12年１月17日から実施することを決めた。いずれにしても、防災対策工事は６月の梅雨時期までには完了しなければならないので、調査は可能な限り速やかに対応して欲しいとの極めて強い要望がだされたのである。

確認調査が終了後の平成12年２月１日には六者会議を開催し、確認調査の結果報告、今後の発掘調査の体制、方法等について具体的な協議を行った。この会議においては次の３点が確認された。すなわち、第１点は発掘調査面積が1550平方メートルであること、第２点は地滑り工事が梅雨時期までに完了しなければならないこと、第３点目はその工事期間が最低でも２ヶ月間は必要であることである。この条件を満たすためには、逆算すると、３月末までには調査を終了させる必要があった。しかし、調査体制、調査経費等の問題から調査をいつから実施できるかについての結論を得ることができなかった。この間にも、地滑りは進行しており、事態は益々憂慮できない状態となっていたため、会議の席上、「災害防止のためには、遺跡破壊もやむなしということも考えられるが、そのような事例はあるのか」という質問まで出される事態になった。その日に再度、流通団地整備班と県文化課で協議した結果、「防災工事を遅延して、災害が起きた場合の補償問題（人的被害、家屋損壊等）を考慮した上での行政判断が必要である」との認識から、文化財保護法第57条の５・６において、やむを得ない条文があるが、一応、文化庁にも確認をとることとにした。文化庁からは、「危険の度合いにもよるが、最低限の調査（工事立会）は必要か。いずれにしても、県の判断に委ねる」との指導を得たため、県文化課で内部検討をすることになった。その結果、「安全に調査が出来ることが確認されない限り、調査は無理である。但し、記録保存の発掘調査が実施出来ないのであれば、書類上で危険度を確認する必要がある」という最終的な判断をしたのである。

平成12年２月22日に久世町教育委員会を除く五者会議において、県文化課から調査方針が提示し了承された。その内容は次の通りである。「確認調査後もいつ地滑りが発生するか事業者側、地質専門家においても判断できない極めて危険な状態であることから、周辺住民の生存権、調査関係者の危険性を考慮しなければならない。即ち、人命最優先の観点に立った調査にすべきであると判断し、調査は基本的に工事立会による調査とすること」にした。さらに、調査中は地滑り監視人のもとで実施し、危険であると判断された場合は直ちに中止することにした。

平成12年２月15日付け、企立第230号で岡山県知事石井正弘から文化財保護法第57条の３による発掘の通知書と共に地滑り状況とその危険度を示すデーターが提出された。このような経緯を経て、この緊急調査は平成12年２月28日から実施されたのである。

最後ではありますが、地元の久世町教育委員会に「地滑り工事に伴う緊急調査の協力について」の依頼文を出したところ、快く積極的に協力をしていただきましたことに対して深く感謝いたします。

（松本）

第２節　調査・報告書作成の体制

確認調査は、平成12年１月17日から１月28日まで、立会調査は平成12年２月２８日から３月７日まで実施した。また、報告書の作成は、平成12年４月から岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施した。

発掘調査体制

岡山県教育委員会
　教 育 長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　宮野　正司
文化課
　課　　長　　松井　英治
　課長代理　　佐々部和生
　参　　事　　正岡　睦夫
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本　和男（調査担当）
　文化財保護主査　　大橋　雅也（調査担当）
　主　　任　　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　葛原　克人
　次　　長　　大村　俊臣
　〈総務課〉
　総務課長　　小倉　　昇
　課長補佐（総務係長）　安西　正則
　主　　査　　山本　恭輔
　〈調査第一課〉
　課　　長　　高畑　知功
　課長補佐（第一係長）　中野　雅美（調査担当）
　文化財保護主査　　福本　　明（調査担当）
　文化財保護主任　　扇崎　　由（調査担当）
　文化財保護主事　　佐藤　寛介（調査担当）
　主　　事　　米田　克彦（調査担当）

久世町教育委員会
　〈生涯学習課〉
　主　　幹　　池上　　博（調査担当）

報告書作成体制

岡山県教育委員会
　教 育 長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　宮野　正司
文化課
　課　　長　　松井　英治
　課長代理　　松本　和男
　文化財保護主査　　福本　　明
　主　　任　　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　正岡　睦夫
　次　　長　　能登原　巧
　〈総務課〉
　課　　長　　小倉　　昇
　課長補佐（総務係長）　安西　正則
　主　　査　　山本　恭輔
　〈調査第一課〉
　課　　長　　高畑　知功
　課長補佐（第一係長）　中野　雅美
　文化財保護主任　　扇崎　　由（報告書担当）

報告書作成協力者

日野　佳子

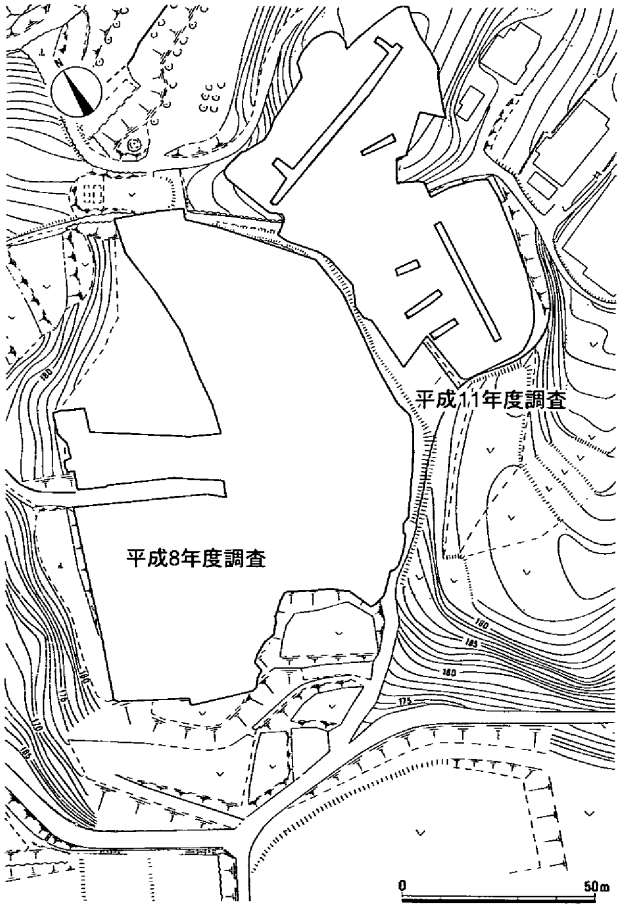
第３節　　調査の経過

（１）確認調査

調査は、久世町中原地内で発生した地滑り防災工事に伴い実施されたものである。調査地は、目木川の左岸に位置し、平成７年度から９年度にかけて岡山県北流通センター建設に伴い発掘調査された旦山遺跡に隣接する地点にあたる。旦山遺跡では、多数の弥生時代の竪穴住居、袋状土壙群をはじめとして、縄文時代の落とし穴群、古墳群、古代および中世の建物群、土壙等々が発見されており、県北における有数の大規模遺跡であることが明らかとなっている。このため、遺跡の北東辺に接する当該地点においても、遺跡の存在する可能性が高いと考えられたため、事前に確認調査を実施することとなった。

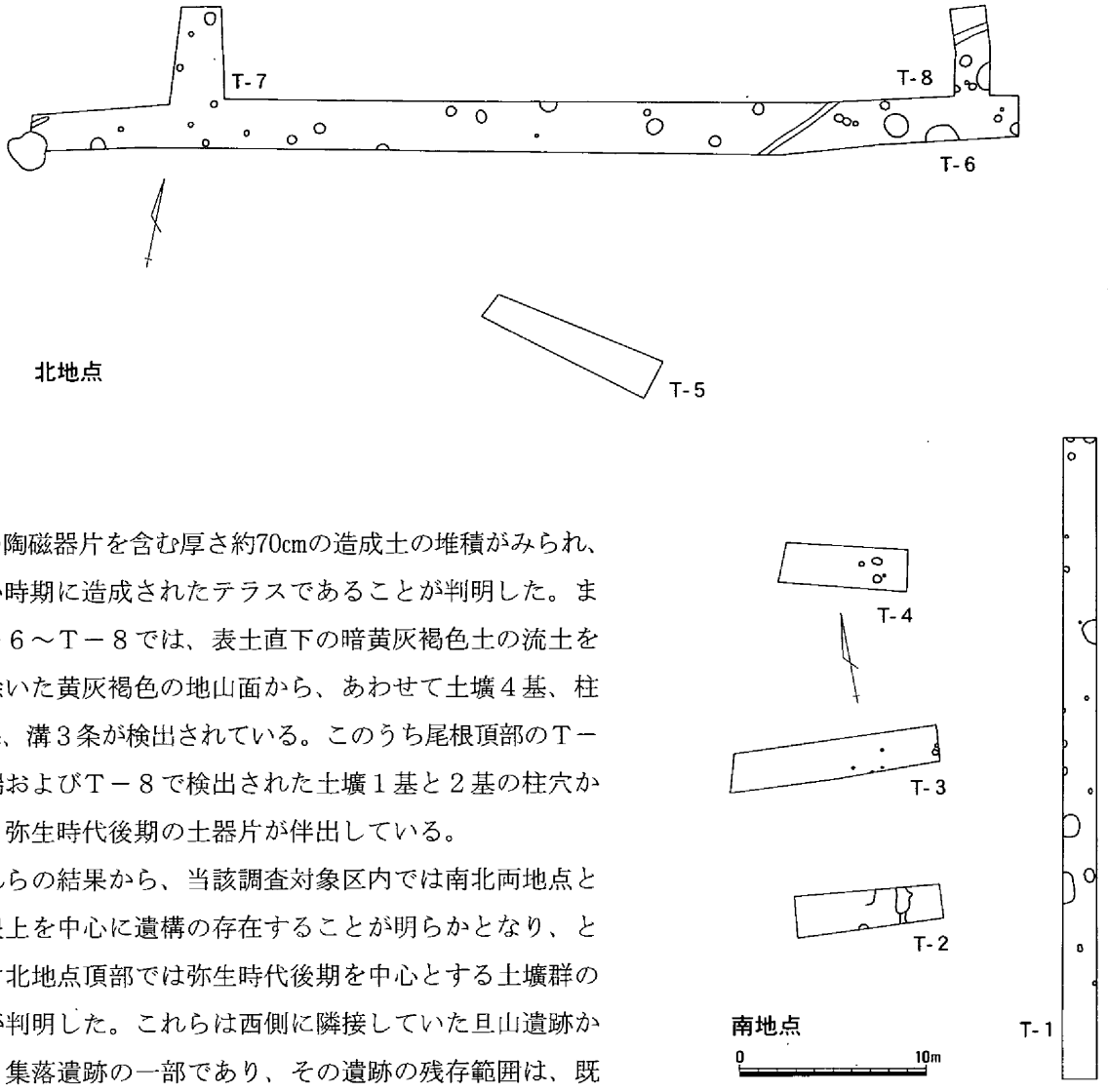
確認調査は、平成12年１月17日より着手し、１月28日まで行った。調査対象地は、南北に連なる小丘陵の尾根上および旦山遺跡方向の西側斜面にあたり、調査区の中央を走る町道の切り通しを挟んで南側の丘陵部を南地点、同じく北側を北地点と呼称した。

南地点は、幅約10mほどの丘陵鞍部と西側の緩やかな斜面部からなり、調査では幅２mのトレンチを稜線上に１か所（Ｔ－１）、西側の斜面部に３か所（Ｔ－２～Ｔ－４）設定し、表土は重機により除去した。このうち尾根上にあたるＴ－１周辺はかなり削平を受けており、約15cmの表土層の直下は黄灰白色を呈する地山となっている。遺構は地山上面から柱穴14基、土壙３基が検出されているが、浅いものが多く、いずれも遺物は伴っていないためそれらの時期を特定するにはいたらなかった。また西側の斜面に設定した各トレンチについては、Ｔ－２で柱穴１基と風倒木痕、Ｔ－３では柱穴６基、Ｔ－４では柱穴５基が地山上から確認されており、遺物はほとんど認められないものの、これらの地点においても遺構の存在することが明らかとなった。



第２図　トレンチ配置図（１/2,000）

北地点は、標高約200mの丘陵頂部から西側の斜面一帯にかけての区域で、斜面南側のテラス状の平坦面にＴ－５、斜面に平行する形でＴ－６、またＴ－６の頂部と裾部に直角方向にＴ－７、Ｔ－８を設定した。このうち、Ｔ－５については、斜面上に近



第３図　確認調査遺構配置図（１/400）

現代の陶磁器片を含む厚さ約70cmの造成土の堆積がみられ、新しい時期に造成されたテラスであることが判明した。またＴ－６～Ｔ－８では、表土直下の暗黄灰褐色土の流土を取り除いた黄灰褐色の地山面から、あわせて土壙４基、柱穴31基、溝３条が検出されている。このうち尾根頂部のＴ－６東端およびＴ－８で検出された土壙１基と２基の柱穴からは、弥生時代後期の土器片が伴出している。

これらの結果から、当該調査対象区内では南北両地点とも尾根上を中心に遺構の存在することが明らかとなり、とりわけ北地点頂部では弥生時代後期を中心とする土壙群の存在が判明した。これらは西側に隣接していた旦山遺跡から続く集落遺跡の一部であり、その遺跡の残存範囲は、既に削平を受けている部分を除き、南地点で780㎡、北地点で770㎡となり、合わせて1,550㎡について全面調査を行う必要があることが確認された。

（２）全面調査

確認調査の結果を受け、事前の発掘調査について協議が重ねられた。その結果、当該地における発掘調査については、防災工事の緊急性もさることながら、発掘作業時の地滑り災害の発生が危惧され、調査員・作業員の安全確保の上からも、調査は限られた短期間で実施せざるを得ないという認識にいたった。

こうした状況の中で、全面調査は平成12年２月28日に着手した。調査にあたっては、確認調査の成果をもとに、南・北両地点あわせて1,550㎡の調査区全域について、重機により地山上面まで掘削し、遺構の検出を行った。このうち南地点については、確認調査でみられたとおり、尾根上部はかなり削平を受けており、明確な遺構の存在はみられなかったが、調査区北端より切り合い関係にある２軒の住居跡が検出されたほか、西側斜面からは袋状土壙、落とし穴等もみつかっている。一方北地点では、確認調査において頂部周辺でみられた土壙のいくつかは、旦山遺跡としては初めての弥生時代後期の

土壙墓であることが判明し、西側の斜面部においても土壙、落とし穴等が検出されるなど、いくつかの新たな知見を加えることができた。

全面調査については、表土掘削を含め、実働７日間という苛烈な条件の下で十分な調査が行われたとは言い難いが、上記のような成果をもって、平成12年３月７日に終了した。

（３）日誌抄

（確認調査）

平成12年１月17日（月）	重機により表土除去、発掘器材搬入、Ｔ－２・３・４掘り下げ精査
１月18日（火）	Ｔ－１掘り下げ精査、Ｔ－２・３・４写真撮影
１月19日（水）	Ｔ－１・２・３・４平面・断面実測、Ｔ－１写真撮影、Ｔ－６・７掘り下げ精査
１月20日（木）	Ｔ－５・６・８掘り下げ精査
１月21日（金）	降雪により現場作業中止、図面整理
１月24日（月）	Ｔ－５・６・８精査写真撮影、Ｔ－５断面実測
１月25日（火）	Ｔ－６・７精査、Ｔ－６・８平面実測
１月26日（水）	Ｔ－６・７平面・断面実測・写真撮影、Ｔ－１・２・３・４・５トレンチ配置図作成
１月27日（木）	降雪により現場作業中止、図面整理
１月28日（金）	発掘器材洗浄、整理

（全面調査）

平成12年２月28日（月）～29日（火）	重機により表土除去
３月１日（火）	掘り下げ精査、遺構検出、北地点遺構実測・写真撮影
３月２日（水）	北地点土壙群検出、実測写真撮影 南地点住居跡・土壙等検出、地形測量
３月３日（金）	北地点遺構検出、実測写真撮影、地形測量 南地点住居跡実測
３月６日（月）	北地点土壙墓検出、遺構実測
３月７日（火）	北地点土壙墓実測、全景写真撮影、発掘器材撤収

（福本）

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

岡山県真庭郡久世町は、ＪＲ姫新線や中国自動車道が建設された津山から新見にかけて連なる盆地列のほぼ中央部に位置する山間部の町で、周囲に湯原、勝山、落合、久米、鏡野の各町と富村が境を接している。現在の町域は昭和30年に確定したもので、旧久世町と美和村の合併による面積75.12km²を測るが、その81％は山林である。この地域の気候は、比較的温暖で雪は少なく、台風や地震などの自然災害もほとんどない。

久世町の地形は、旭川とその支流である目木川が形成した沖積平野を中心に、北は中国山地、南は吉備高原の一部が含まれる。北部の中国山地は高くて急峻で、町内の最高所である三坂山の標高903mを筆頭に、摺鉢山で879mに達し、その南面は多くの深い谷が入り込んでいる。急峻な山地の麓には、標高200～300mの低い山地または丘陵が横たわり、沖積平野との境をなしている。一方、沖積平野は極めて平坦となっており、久世町の中心地として商工業の集積が進んでいる。

ここで、久世町全域の地理的環境をもう少し細かく理解するために、町内を流れる大小の河川の流路を上流に向かって辿りながら、周辺の地形を概観してみたい。

久世と勝山の町境から目木川の合流地を経て落合町に至る範囲の旭川は、川幅が広くて緩やかな曲線を描きながらゆったりと流れるが、上流の勝山町以北では川幅が極端に狭くなって流路が屈曲し、全般にわたって深い谷地形を形成している。

旭川と目木川が合流する中島の地点から、北東方向に向かって目木川を約３kmほど遡ると、東方向の前方に岡山県北流通センター建設予定地の南区域を望むことができる。ここは久世と落合の町境になる丘陵が、沖積平野の方向へ舌状に張り出しているため、目木川の流れを妨げることになり、その上流の流路が緩やかに湾曲して川幅を広くし、丘陵に囲まれた沖積地に水田を形成している。

一方、目を西方向へ転ずれば、砥石山の麓から南方向に張り出した長くて広い台地が存在し、その先端部分に久世中学校がある。この台金屋を中心に東の目木から西の鍋屋まで続く台地は、旭川や目木川の流域に所在する沖積平野を目前にし、眼下の水田面から低い地形になっている。

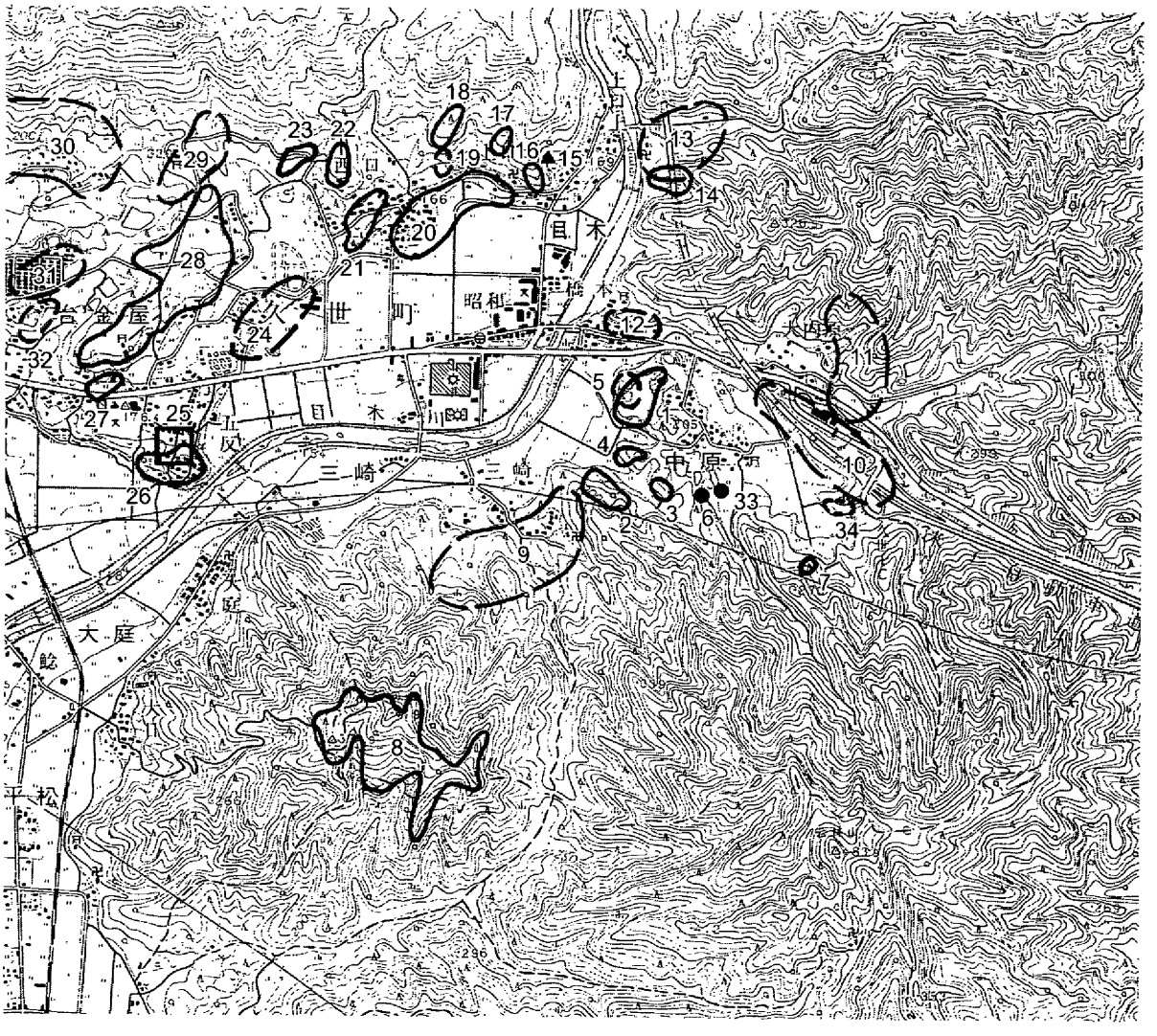
旭川の左岸に位置する久世町久世の旭町と下町の境界地点には、元町で合流した三坂川と小谷川が北方向から流入している。三坂山山麓の三坂川と小谷川に挟まれた地域には、上面が平坦で低い丘陵が所在する。さらに小谷川の上流や右岸の宮芝グラウンド周辺にも、旭川流域の沖積平野に面した緩斜面が認められる。

旭川右岸には主要な河川がなく、横畝川などの小河川が旭川に向かって北流するが、水源からの距離が極めて短く、落合町との境界に位置する急峻な山の麓が、旭川の河原になっている。

このような地形である久世町の地理的環境から遺跡の立地条件を推定すれば、旭川と目木川に挟まれた目木から台金屋を経て鍋屋に至る台地上が最も良好で、目木川の左岸に位置する岡山県北流通センター建設予定地の南区域がそれに続き、旭川の右岸地域は悪いと思われる。

第２節　歴史的環境

久世町に人間が最初に足を踏み入れたのは、縄文時代早期に遡ると推定される。その傍証となる最古の遺物は、楕円や格子目の押型文を有する縄文土器で、上野遺跡[1]、大旦遺跡[2]、薬王寺西山遺跡[3]、長光寺山遺跡[4]で出土している。上野遺跡では前期になっても人間が活動した痕跡が認められ、爪形文や貝殻条痕文の土器が採集されている。中期には目木川上流の江森遺跡[5]が知られているだけであるが、後期になると前述の上野遺跡をはじめ、三坂川流域の三栄神社裏山遺跡[6]や小谷川流域の宮芝遺跡[7]で、磨消縄文を有する土器が出土している。晩期の遺物として五反遺跡[8]の鉢形土器が存在するが、



1．旦山遺跡	2．惣台遺跡	3．先旦山遺跡	4．野辺張遺跡	5．旦山古墳群
6．奥田古墳	7．水神ヶ峪遺跡	8．篠向山城跡	9．三崎古墳群	10．中原古墳群
11．大内原古墳群	12．宮ノ此古墳群	13．木谷古墳群	14．木谷遺跡	15．経塚
16．引屋敷遺跡	17．上ノ山遺跡	18．戸坂遺跡	19．戸坂古墳群	20．西口遺跡
21．上連遺跡	22．多田須遺跡	23．細シ遺跡	24．金屋古墳群	25．五反廃寺跡
26．五反遺跡	27．岡松遺跡	28．大旦遺跡	29．新池古墳群	30．多田古墳群
31．蛇ノ尾古墳群	32．長光寺古墳群	33．同々古墳	34．古墳群	

第４図　周辺遺跡分布図（１/25,000）

平成６年度から８年度にかけて実施した岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査で、旦山遺跡と惣台遺跡から遺構の落とし穴も検出された。

弥生時代になると前述の五反遺跡より前期後葉の土器が出土しており、中期後葉から後期前葉にかけては集落跡と思われる遺跡が急激に増大する。目木川の流域では、旦山遺跡、惣台遺跡、野辺張遺跡だけでなく、木谷遺跡[9]や上野遺跡などが存在する。目木川と旭川に挟まれた地域では、縄文時代晩期から継続している五反遺跡以外に、大旦遺跡や宮芝遺跡などが知られている。これらの遺跡では、竪穴住居や土壙などの遺構を検出し、それに伴う弥生土器や石器などの遺物が出土している。ところが弥生時代の墳墓については、現在のところ確認されていない[追1]。

古墳時代になると古墳が数多く築造されるが、集落跡は不明である。久世町内の前方後円墳は、惣古墳群のアタゴ山５号墳[10]と堂ノ旦１号墳[11]が知られているが、両者とも規模が小さい。また旦山古墳群に近接した北側の尾根上には、宮ノ屺１号墳[12]という前方後方墳が所在するが、現地踏査を行った結果では、２基の方墳が連なっているのかもしれないという印象をもった。

５世紀中葉の頃になると造墓活動が活発になり、中原古墳群[13]のように低平な墳丘を有する方墳や円墳が、丘陵の尾根上に数多く築造される。さらに後期になると町内各所に群集墳が形成され、埋葬施設が横穴式石室の古墳が出現する。木谷古墳群の11号墳では、装飾付脚付子持壺やトンボ玉を含む多量の遺物が出土した。

７世紀中葉の白鳳時代になると、五反廃寺[14]が造営される。この寺は大庭郡大庭郷にあり、造営氏族として大庭臣が考えられる。この大庭臣は「続日本紀」天平神護２年（766）条に、「美作国人従八位下白猪臣大足賜姓大庭臣」とあり、美作国人白猪臣大足が大庭臣を賜姓されたことがわかる。そして吉備での「白猪」は白猪屯倉との関係が推定され、555年の白猪屯倉設置に伴い大和政権から派遣された白猪史氏に関わるものと推察される[15]。

なお東西方向に所在する出雲街道を挟んで約１kmの地点には、10数点の墨書土器とともに陶製円面硯や獣足壺の脚部が出土した、郡衙推定地の西口遺跡[16]が存在する。

ところが、平安時代以降の古代の遺構や遺物は、極端に少なくなる。遺構としては４基の火葬墓が発見された上野火葬墓[17]や上口地区と富尾地区の経塚が所在し、遺物は大旦遺跡や五反遺跡で採集されている。

また確実に中世に属する遺構は、中原古墳群の墳墓だけであり、中世か近世か判断できない遺構には、木谷古墳群で数多く検出した土壙墓群がある。町内における近世の時期と確認された土壙墓群は、先旦山遺跡と水神ヶ峪遺跡がある。（福田）

註

（１）山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91』1994年
（２）松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告57』1984年
（３）松本和男・船津昭雄「久世の夜明け」『久世町史』1975年
（４）註３に同じ。
（５）註３に同じ。江森遺跡は『久世町史』では余野上遺跡となっている。
（６）註３に同じ。
（７）註３に同じ。
（８）註３に同じ。

（９）福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』1995年
(10) 池上　博『久世町埋蔵文化財分布地図』久世町教育委員会　1989年
(11) 註10に同じ。
(12) 註10に同じ。
(13) 福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』1995年
(14) 池上　博「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告２』1997年
(15) 亀田修一「吉備における古代寺院の出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景』埋蔵文化財研究会・第42回研究集会実行委員会　1997年
(16) 註３に同じ。
(17) 註３に同じ。

追注

（１）今回の調査で、弥生時代後期の土壙墓５基が確認された。

第３章　調査の概要

調査は、前述のとおり調査区の中央を走る町道の切り通しを境として、北地点と南地点とに分けて行った。北地点では、丘陵頂部東斜面で弥生時代後期の土壙墓・土壙、西斜面で縄文時代の落とし穴・中世の土壙・時期不明の土壙などを検出している。また、南地点では尾根上で弥生時代後期の住居２軒が切り合って検出され、またその西斜面では縄文時代の落とし穴、弥生時代の袋状土壙・土壙などが検出された。これらにより、平成８年度に実施した全面調査では明らかにできなかった旦山遺跡の弥生集落の丘陵上方への広がりや、弥生時代後期における居住域と墓域の関係の一端が明らかとなった。

第１節　縄文時代の遺構

（1）落とし穴

縄文時代の落とし穴と考えられる遺構は、北地点で１基、南地点で３基検出した。平面形は長方形が２基、円形が１基、他が１基でいずれも底面中央に小孔１を持つ。散発的な分布ではあるが、いずれも標高190.9mから192.2mに位置し、等高線に沿った配置をとるものと思われる。

全面調査では65基の落とし穴が検出され、その形態や埋土の違いにより２種類に分けられた。すなわち、１，平面円形で底部は尖り底で小孔を持たず、埋土が「灰色火山灰」のものと、２，平面楕円形または長方形で底部に小孔を持ち、埋土が「クロボク」のものの２種類である。さらに、２地点で切り合い関係が把握され、後者からは縄文晩期中葉の土器が出土している。

土壙１（第６図）

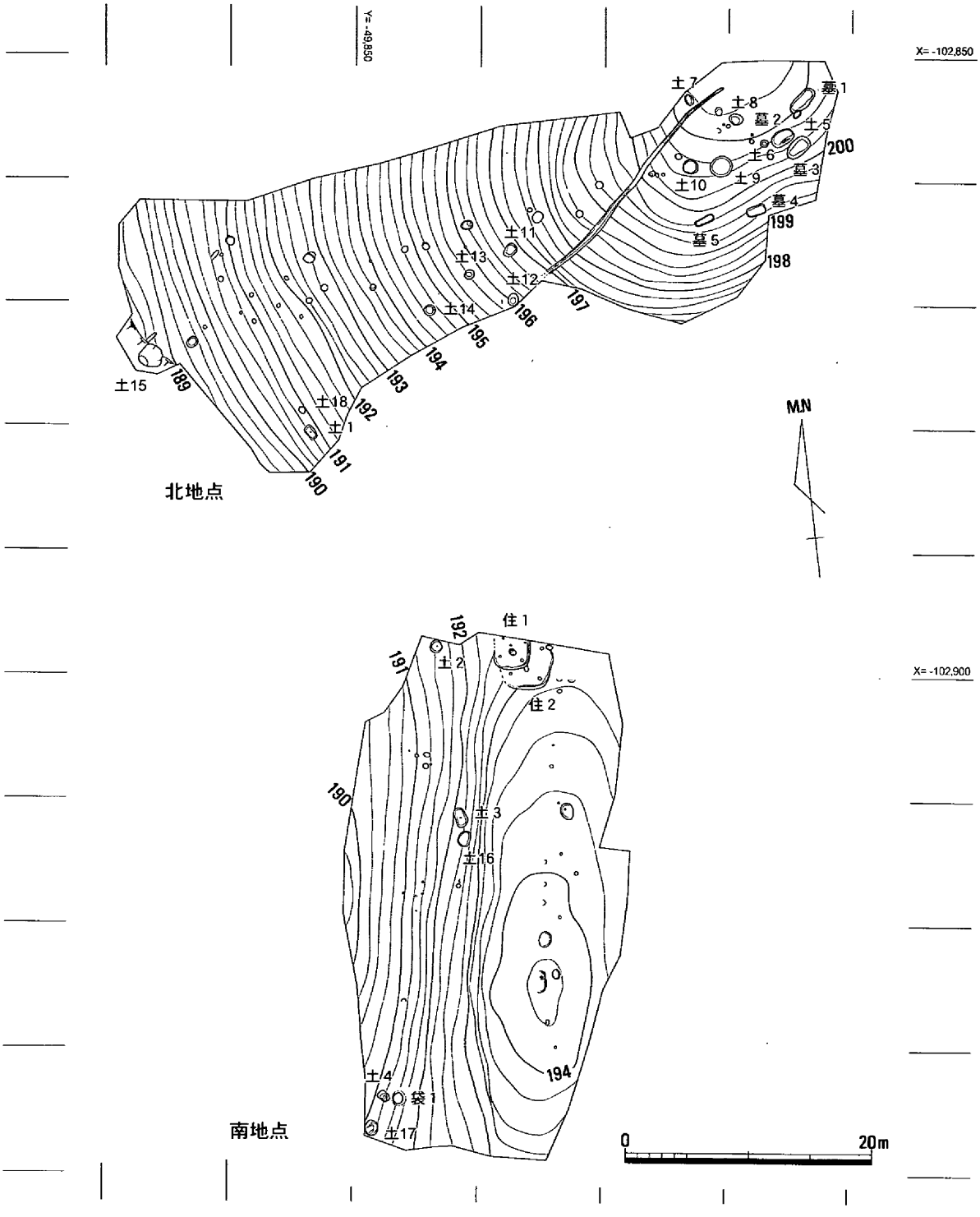
北地点の斜面下端近く、標高190.9mあたりで検出した平面長方形の土壙である。掘り形上面では角はやや丸いが底部では比較的立っている。長軸はほぼ等高線に沿っている。上面で115×68cm、底部で87×41cm、検出面からの深さ62cmを測り、壁面はほぼ垂直である。底部中央には杭を立てたと考えられる径12cm・深さ34cmの小孔１を持つ。埋土は、「クロボク」とそれに黄褐色の粘質土がまざった土が堆積している。土器等の出土遺物はなかったが、埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

土壙２（第７図）

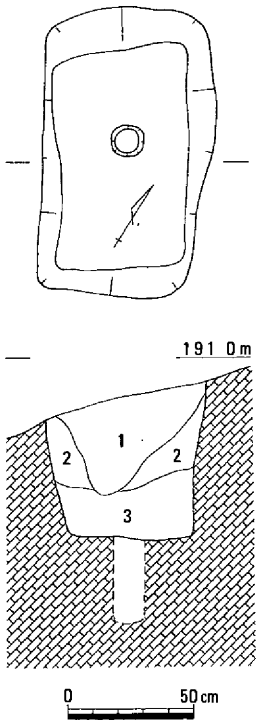
南地点西斜面の北端、標高191.5mあたりで検出した平面円形の土壙である。上面で径98cm、底部で径78cm、検出面からの深さ86cmを測り、壁面はほぼ垂直で検出面から深さ20cmで土壙の中心が東に16cm移動する。底部中央には杭を立てたと考えられる径17cm・深さ20cmの小孔１を持つ。埋土は、「クロボク」が堆積している。埋土中から極細片であるが砂粒の目立つ土器片が出土したことや、埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

土壙３（第８図）

南地点西斜面の中央付近、標高192.2mあたりで検出した平面長方形の土壙である。角は上面・底部ともに土壙１に比べて立っておらず、隅丸に近い。上面で149×88cm、底部で128×62cm、検出面からの深さ66cmを測り、壁面はほぼ垂直である。長軸は等高線からわずかに西に振っている。底部中央に

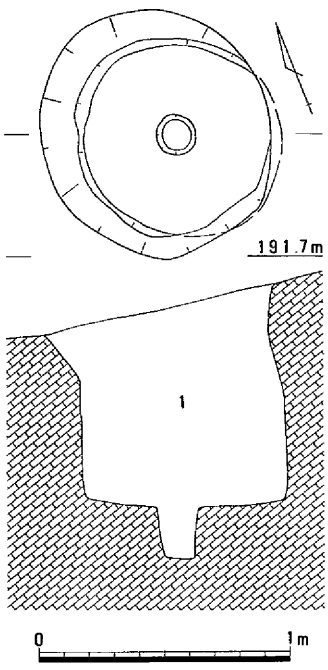


第５図　遺構全体図（１/500）



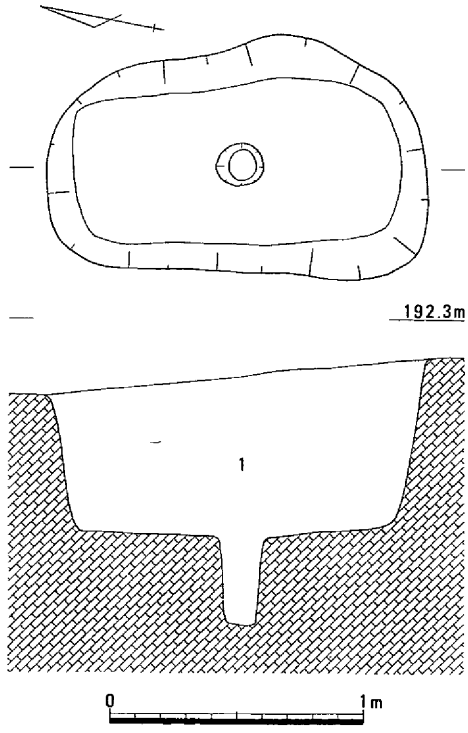
1．黒褐色粘質土
2．１と黄褐色粘質土のブロックが斑文状にまじった土
3．１に黄褐色粘質土が少量まじった土

第６図　土壙１（１/30）



1．黒褐色粘質土

第７図　土壙２（１/30）



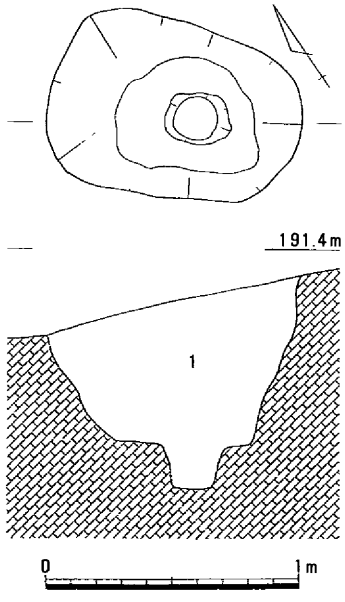
1．暗褐色粘質土

第８図　土壙３（１/30）

は杭を立てたと考えられる径18cm・深さ34cmの小孔１を持つ。埋土は、「クロボク」とそれに黄褐色の粘質土が堆積している。埋土中からは、土器等の出土遺物はなかったが、埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。

土壙４（第９図）

南地点西斜面の南端付近、標高191.2mあたりで検出した土壙で、平面隅丸の長方形から台形に近く、底部では不整円形に近い。上面で98×70cm、底部で58×44cm、検出面からの深さ68cmを測り、壁面は土壙１・２・３と異なりやや斜めである。長軸は等高線の直交方向からわずかに北に振っている。底部中央には杭を立てたと考えられる径24cm・深さ17cmの小孔１を持つ。埋土中からは、土器等の出土遺物はなかったが、埋土から縄文時代の落とし穴と考えられる。



1．黒褐色粘質土

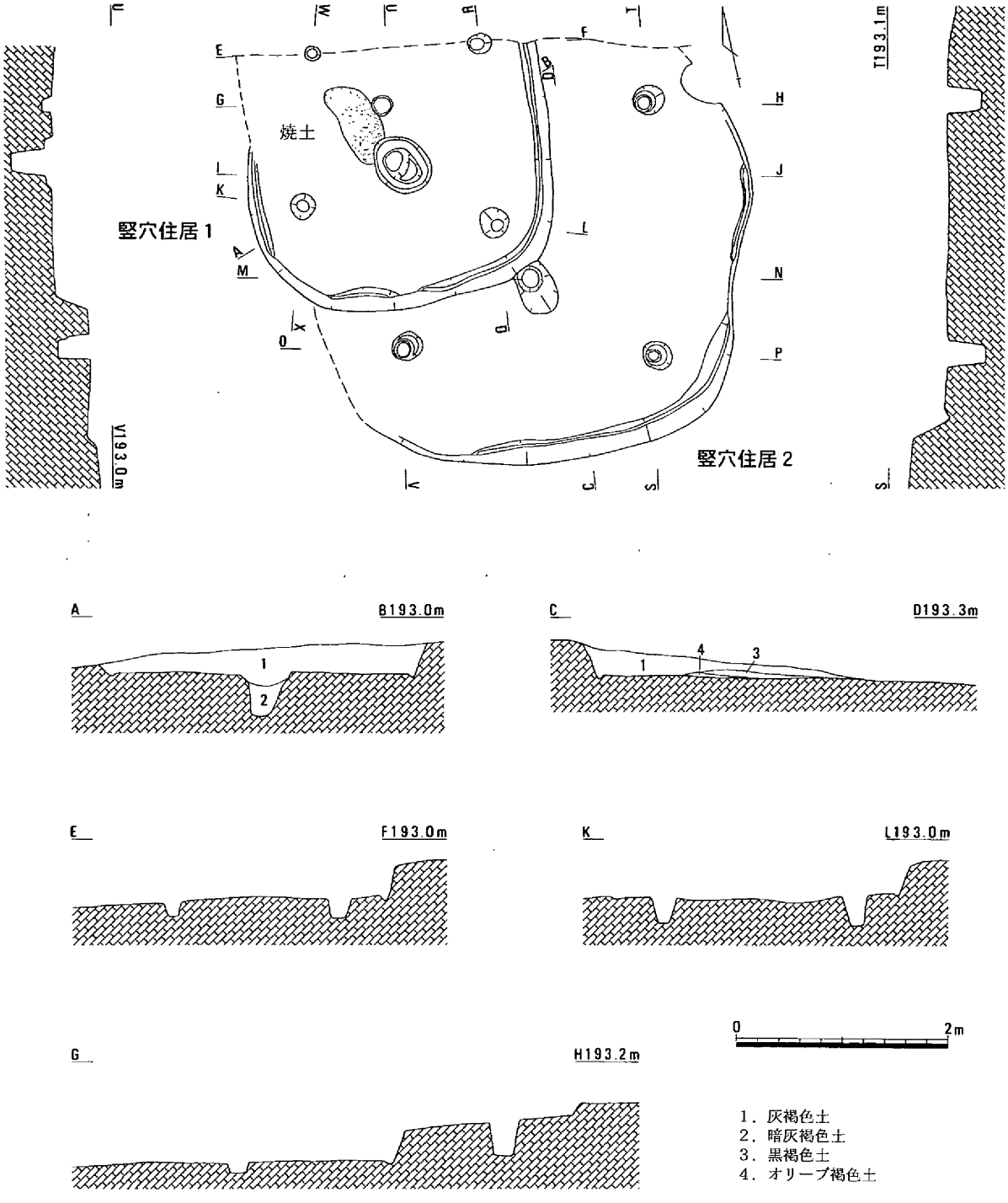
第９図　土壙４（１/30）

第２節　弥生時代以降の遺構と遺物

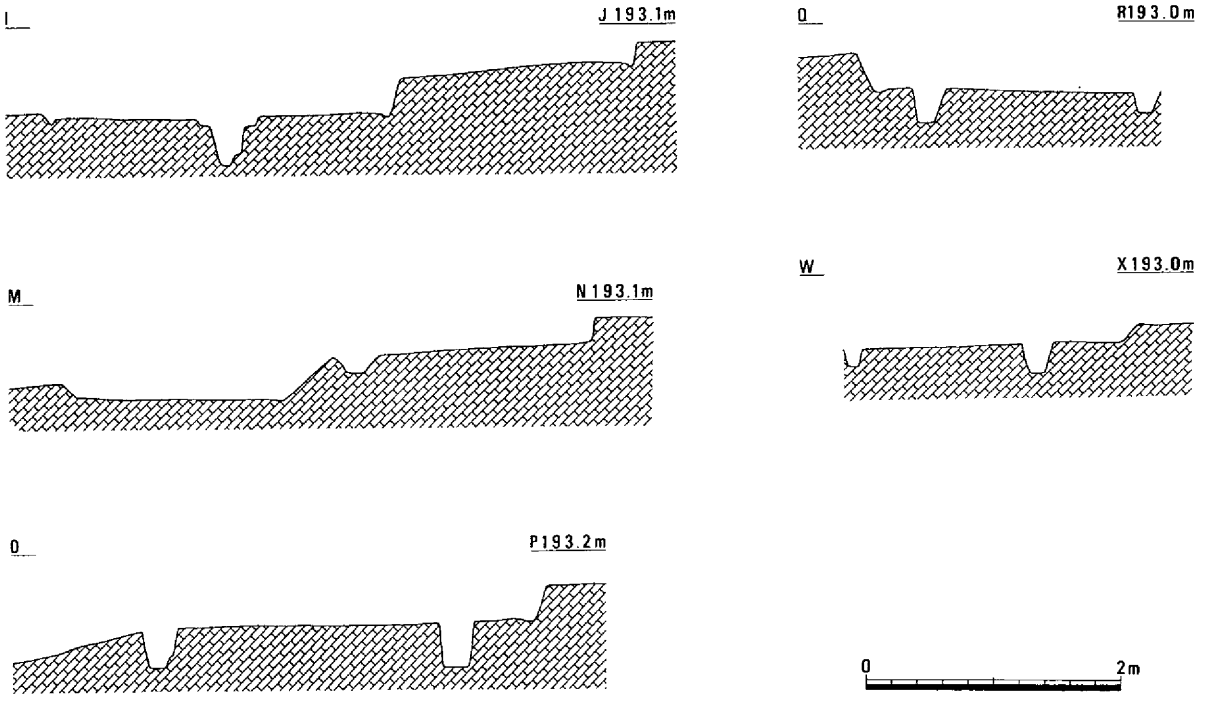
（１）竪穴住居

竪穴住居１（第10・11・12図）

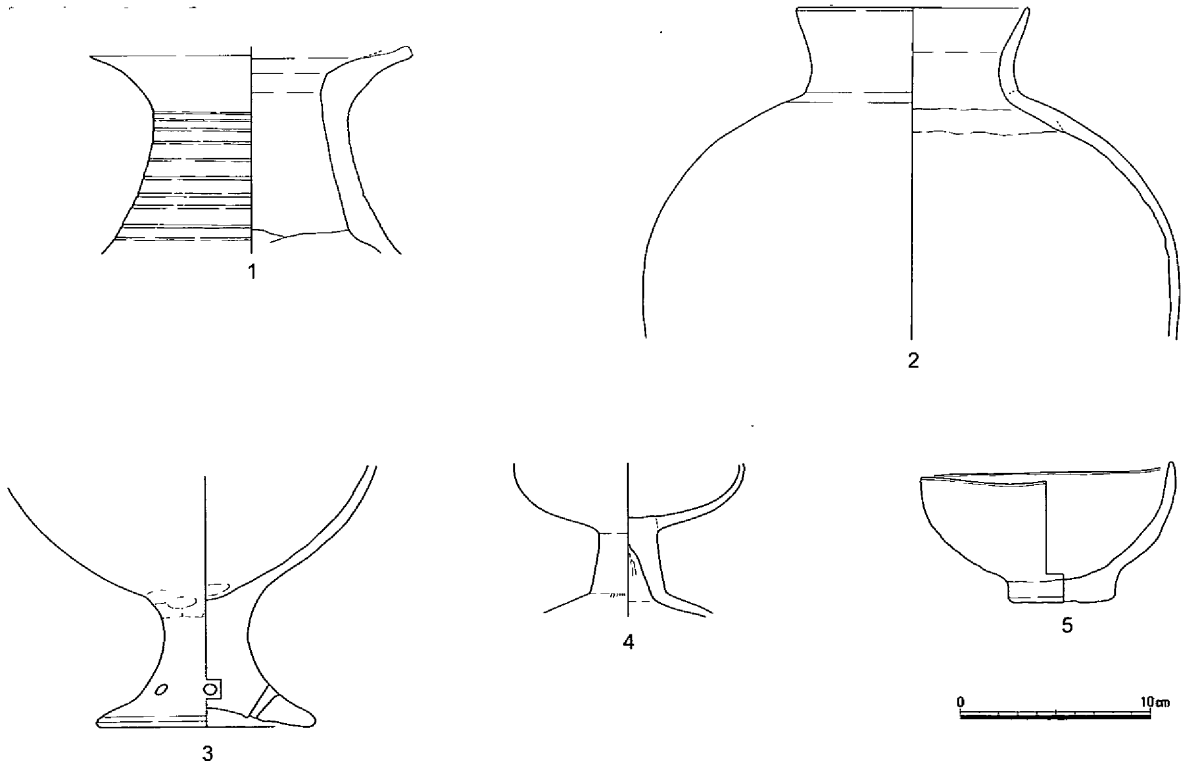
南地点の北端部、頂部からやや西斜面にかかって位置する。竪穴住居２を切っている。北辺は調査



第10図　竪穴住居１・２（１）（1/60）



第11図　竪穴住居１・２（２）（１/60）



第12図　竪穴住居１出土遺物（１/４）

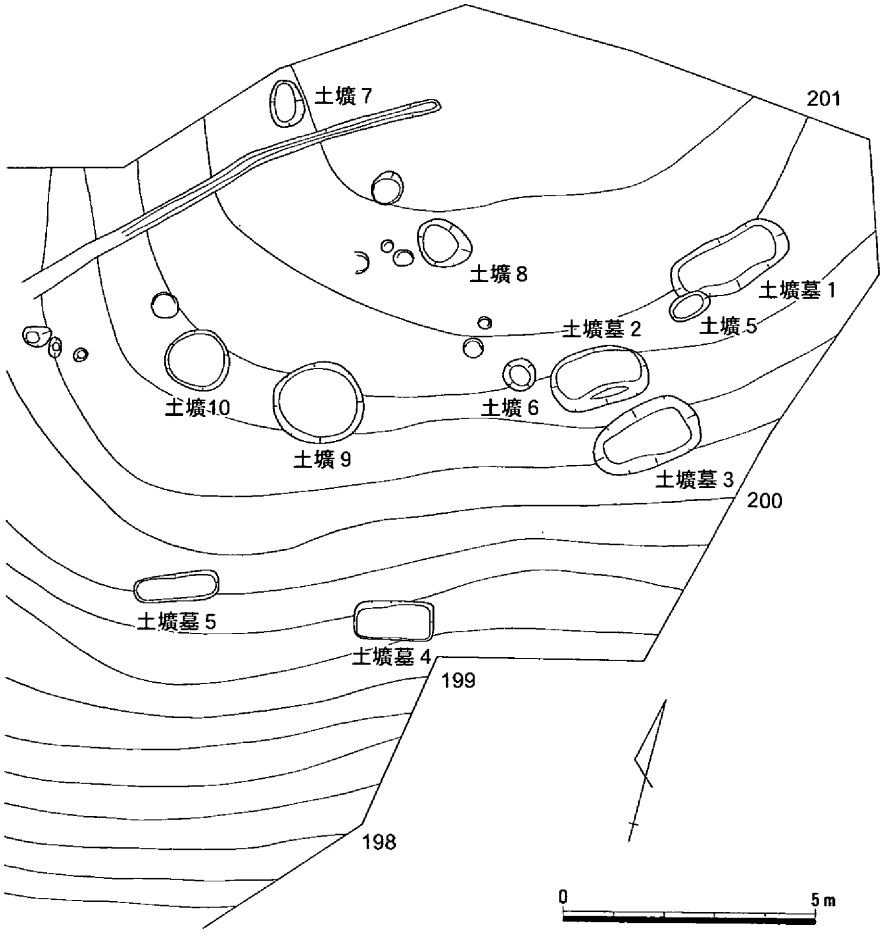
区外、西辺北半は斜面のため流出しているが、南北2.5m以上、東西2.85mのやや南北に長い隅丸方形の住居と思われる。４本柱で中央穴を有し、床面は標高192.4mで、壁体は残りのよい南東部で30cm立ち上がり、一部に途切れた所はあるものの壁体とともに壁体溝を確認した。柱間は1.55m・1.7m・1.82

m・1.45mである。中央穴は上面で北西－南東方向に長い長径61cm・短径48cm、底面では長径46cm・短径26cmを測る楕円形で、底部中央はさらに直径15cm前後の不整円形で９cm深くなっている。床面の中央から北西方向に楕円形に焼土面を検出した。この焼土面は南東部を中央穴により切られている。この住居の埋土は灰褐色土で、中央穴は暗灰褐色土が堆積している。床面直上から出土した完形に近い高杯３をはじめ埋土中からは、壺１・２・高杯４・鉢５などが出土しており、この住居の時期は弥生後期中葉と考えられる。

壺１は口縁受け部から頸部１/３ほどの破片で、端部は擬口縁状を呈する。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈する。２は口径12.2cmの短頸の壺で胴部下半を欠く。胎土は２mm前後の砂粒を含みにぶい橙色を呈する。胴部の一部に赤色顔料が見られる。高杯３は口縁端部を欠くがほぼ完形に近い。脚部はあまり広がらず、脚柱部は充実している。円形の透かし孔７をもつ。高杯４は短脚で、口縁端部と脚端部を欠く。鉢５は口径13.4cm、器高12cmでほぼ完形である。

竪穴住居２（第10・11図）

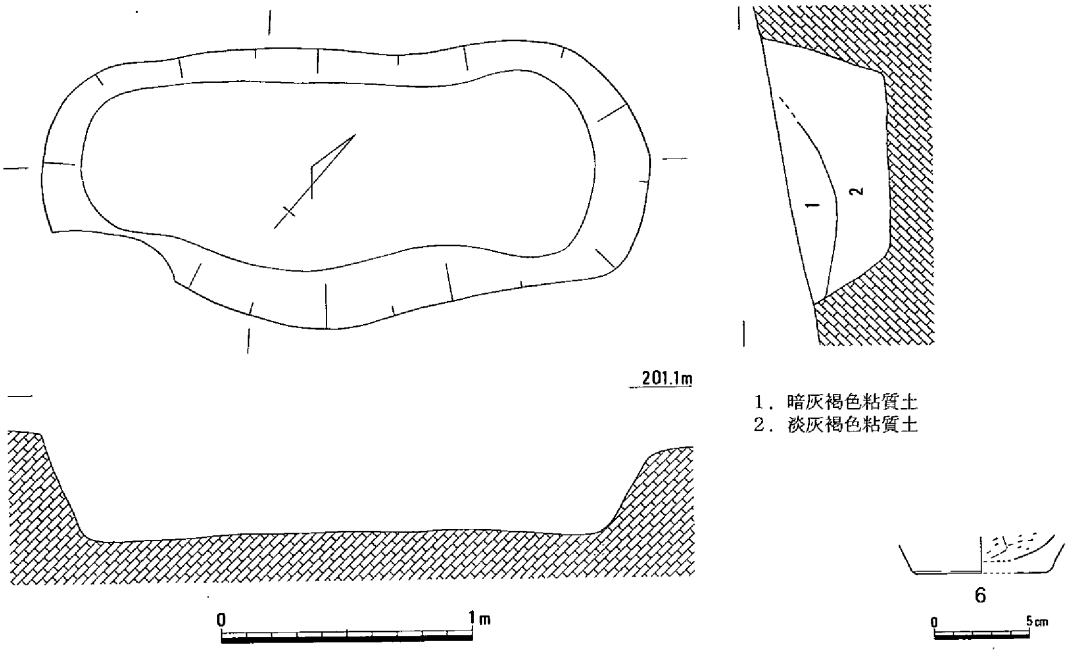
南地点の北端部、頂部からやや西斜面にかかって位置する。北辺は調査区外、西辺北半は斜面のため流出し、さらに北西側１/４は竪穴住居１に切られている。このため現状の平面形は不整円形とも不整隅丸方形ともいえる不定形な形状となっており、南北で3.95m、東西で4.2m以上となる。柱構造は４本柱で、北西以外の３基の柱穴では埋土の違いによる柱根痕跡を確認した。柱間は2.45m・2.35m・2.35m・2.3mである。床面中央やや南よりに中央穴を有する。床面は標高192.9mで、壁体は残りのよい南東部で28cm立ち上がる。残りのよい南東側で全周の約１/３で壁体溝を確認した。この住居の埋土は灰褐色土を主体として、一部に黒褐色土・オリーブ褐色土が堆積している。埋土中からは遺物は出土していないが、この住居の時期は、弥生後期と考えられる。



第13図　北地点頂上付近全体図（１/150）

（２）土壙墓

土壙墓は、北地点頂



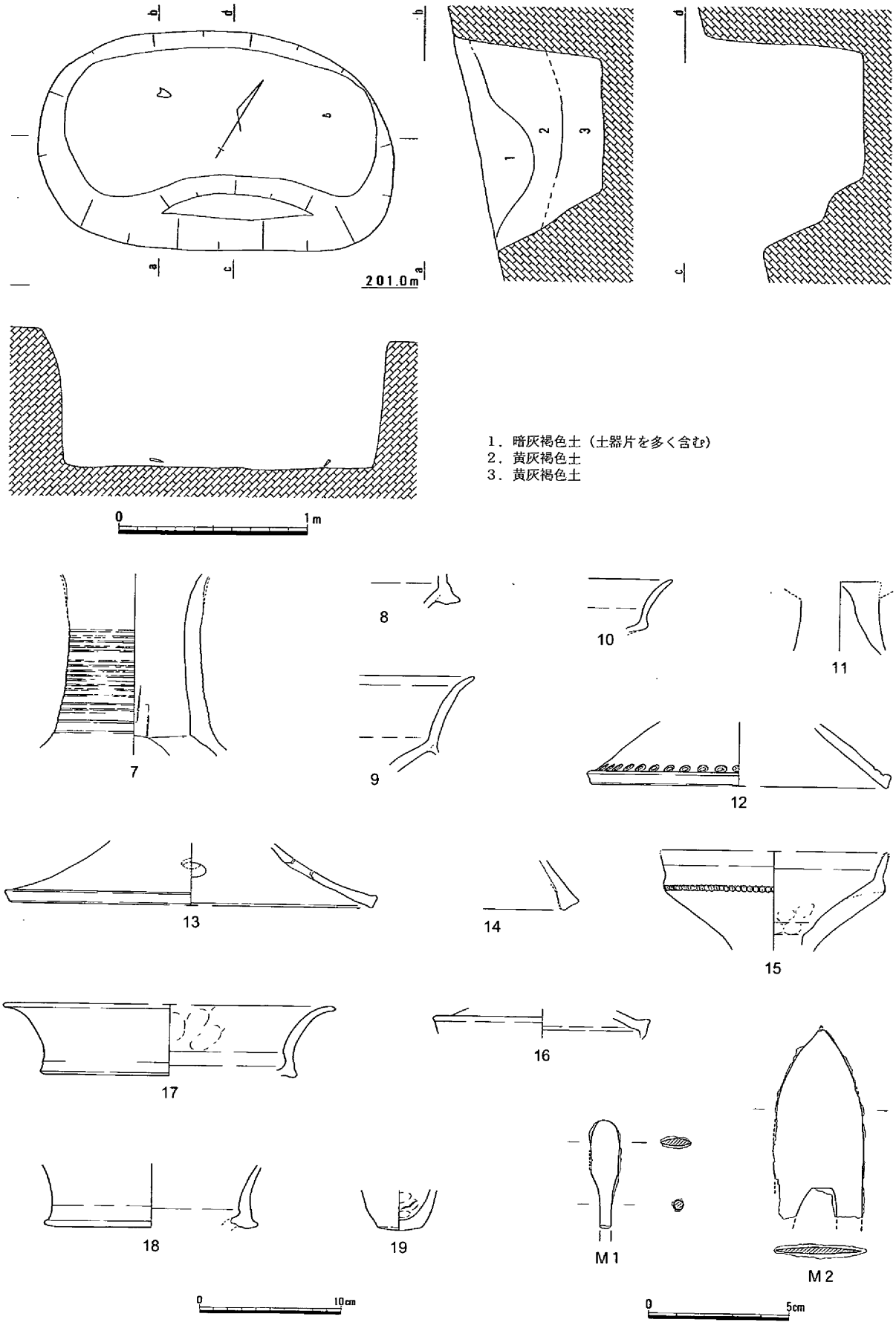
第14図　土壙墓１（１/30）・出土遺物（１/４）

部付近の南斜面で５基検出した。いずれも長方形の墓壙であり、長軸を等高線に沿わせている。これらの土壙墓はおよそ標高199m～201mの間に位置している。さらに細かく見れば互いの位置関係から、土壙墓１・２・３からなる小群１と土壙墓４・５の小群２の２群に分かれそうだ。小群１の土壙墓１～３は標高200.3m～201mにあり互いに３m以内と近接するうえ、土壙墓２と３は隣り合っている。後述の土壙５～10も200.4m～201.2mとほぼ同じ標高にある。小群２の土壙墓４と５はやや離れてはいるものの、標高199.3～199.5mとほぼ同じ高さに位置している。

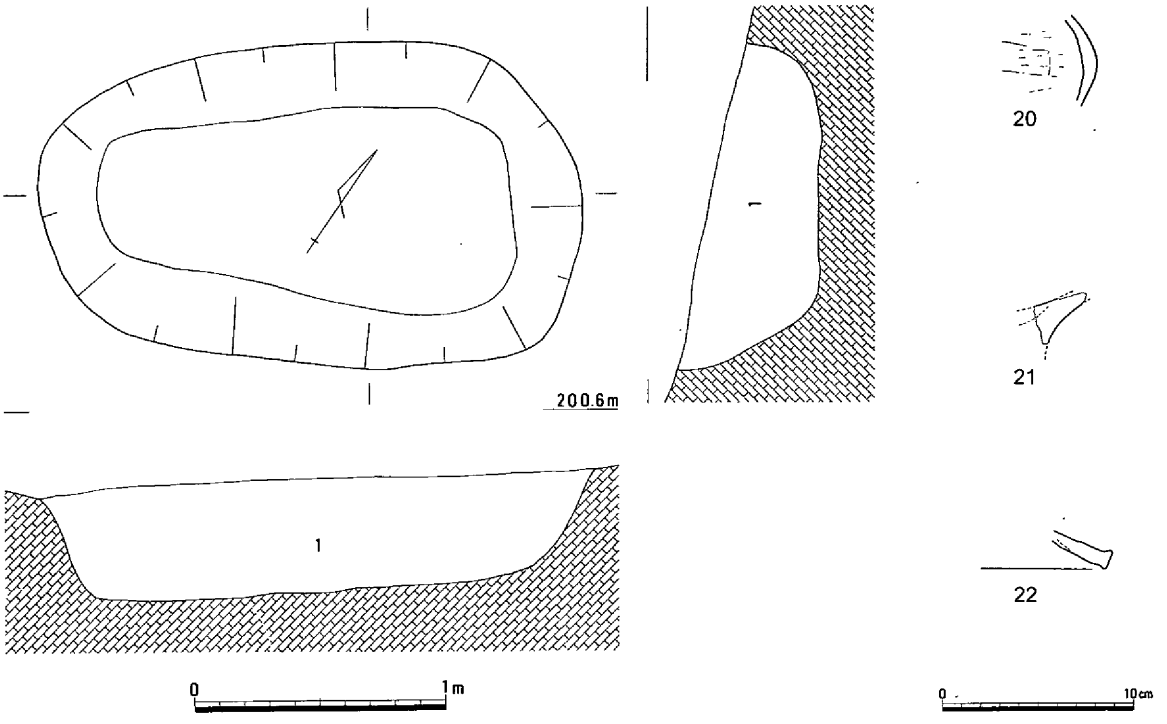
いずれの土壙墓も埋土の上層は地山と区別が付きにくく、プランの確定には再三の精査が要求され、時に底部からの立ち上がりの確認により、平面形の修正を余儀なくされることもあった。このような土層の識別の困難さは、木棺痕跡の追求にも大きく影響を及ぼした。調査の緊急性から必ずしも十分な精査が行われたとは言えない面もあるが、いずれの土壙墓においても明瞭な木棺痕跡や小口溝などは確認されなかった。

土壙墓１（第14図）

北地点頂部付近の南斜面で検出した５基の土壙墓のうちもっとも高所に位置し、土壙墓の小群１に属する。標高201mにあり、長軸は等高線とほぼ平行する。平面形はややいびつであるが隅丸の長方形に近く、南西の隅を後述する土壙５に切られている。上面で240×111cm、底部で203×75cm、検出面からの深さ47cmを測る。壁面はやや緩く立ち上がる。底面は平坦ではあるが、中央がやや高く両小口に向かってわずかに下がっている。不整形な平面形で頭位を判断するのは危険であるが、北東小口の方がわずかに幅が広いので、北東側が頭位の可能性がある。埋土は灰色の粘質土が堆積しており、下層に比べ上層がやや色調が暗い。底面での副葬品は確認されなかったが、埋土中からは弥生後期の壺底部の破片６が出土している。この土壙墓の時期は壺６の胎土や調整の特徴から弥生後期と考えられる。



第15図　土壙墓２（１/30）・出土遺物（１/４・１/２）



第16図　土壙墓３（１/30・出土遺物（１/４）

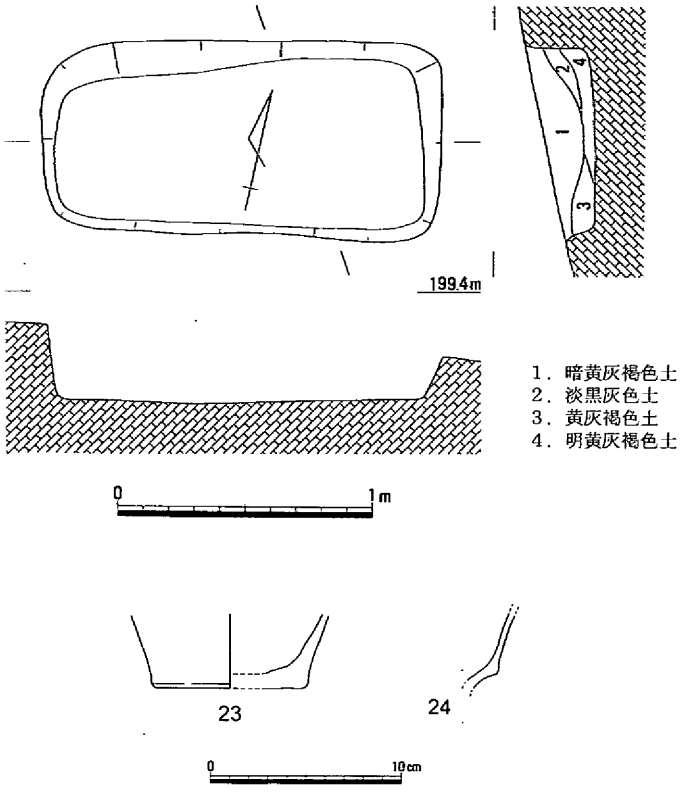
土壙墓２（第15図）

土壙墓１の南西約２ｍに位置する。標高200.8ｍにあり、長軸は等高線にほぼ平行する。土壙墓の小群１に属する。平面形は上面が不整隅丸長方形か不整楕円形に近く、底面は隅丸長方形に近い。上面で187×117cm、底部で164×76cm、検出面からの深さ85cmを測る。壁面は南壁で２段の堀り形を持つほか、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦でほぼ水平である。不整形な平面形ではあるが、西小口の方がわずかに幅が広いのでこちらが頭位と思われる。墓壙内には下層から、黄灰褐色土・黄灰褐色土・暗灰褐色土が堆積している。副葬品として底面から有茎式**Ｍ１**・無茎式**Ｍ２**の鉄鏃２点が出土している。また、埋土中から出土した土器は今回の調査中最も多く、弥生後期の壺**７**～**９**、高杯**10**～**14**、器台**15**・**16**、鼓形器台**17**・**18**、手づくね土器**19**が出土している。この土壙墓の時期はこれらの土器の特徴により弥生後期中葉と考えられる。

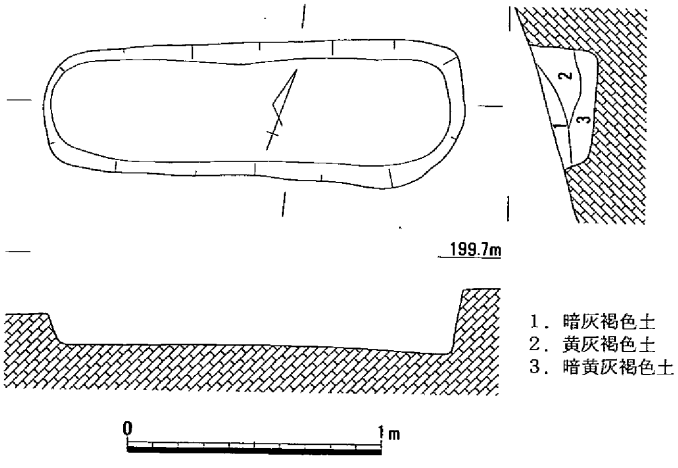
また、後述のように遺構に伴わない土器の大半は、土壙墓２周辺を検出時に出土したものであり、土壙墓１・３や他の土壙からの土器の出土量が少ないことを見れば、その多くは土壙墓２に伴う可能性が高いと思われる。

土壙墓３（第16図）

土壙墓２の南隣にほぼ平行して位置する。標高200.3ｍにあり、長軸は等高線に平行する。土壙墓の小群１に属する。平面形は上面が不整隅丸長方形に近く、底面は隅丸台形に近い。上面で215×128cm、底部で164×78cm、検出面からの深さ55cmを測る。壁面は底面からの立ち上がりの角は丸い。不整形な平面形のため頭位の判断は慎重を要するが、東小口の方がわずかに幅が広く底面も高いことから、東頭位と思われる。底面から副葬品は出土していないが、埋土中からは壺胴部の小片**20**・高杯の小片**21**・**22**が出土している。高杯**21**は杯部底部を円盤充塡しており、この土器の特徴から土壙墓３の時期は弥生後期前半と思われる。



第17図　土壙墓４（１/30）・出土遺物（１/４）



第18図　土壙墓５（１/30）

土壙墓４（第17図）

土壙墓２・３から南西に約５ｍに位置し、土壙墓１～３より１段下がった標高199.3mにある。土壙墓の小群２に属する。長軸は等高線に平行する。平面形は比較的整った長方形で、上面で156×79cm、底部で144×68cm、検出面からの深さ30cmを測る。壁面の立ち上がりは垂直に近い。小口は東がやや広く上面で77cm・底面で65.5cm、西小口が上面で65cm・底面で45.8cm、底面のレベルも東小口側が高いことから、埋葬頭位は東頭位であったと考えられる。底面から副葬品は出土していないが、埋土中からは甕**23**・鼓形器台の小片**24**が出土している。この土壙墓の時期は弥生後期後半と考えられる。

土壙墓５（第18図）

土壙墓４の西約３ｍに位置する。土壙墓４と同じく土壙墓１～３より１段下がった標高199.5mにあり、長軸は等高線に平行する。土壙墓の小群２に属する。平面形は他の土壙墓に比べ細長い隅丸長方形で、上面で165×55cm、底部で156×41.5cm、検出面からの深さ26.2cmを測る。底面は中央がやや高く両小口に向かってわずかに下がっているが、東小口側がやや深い。壁面の立ち上がりは垂直に近い。埋葬頭位については、幅の広い東頭位と推定される。底面から副葬品は出土していないので、時期の判断はしづらいが、周囲の土壙墓の関連性から弥生後期と考えられる。

（３）袋状土壙

袋状土壙１（第19図）

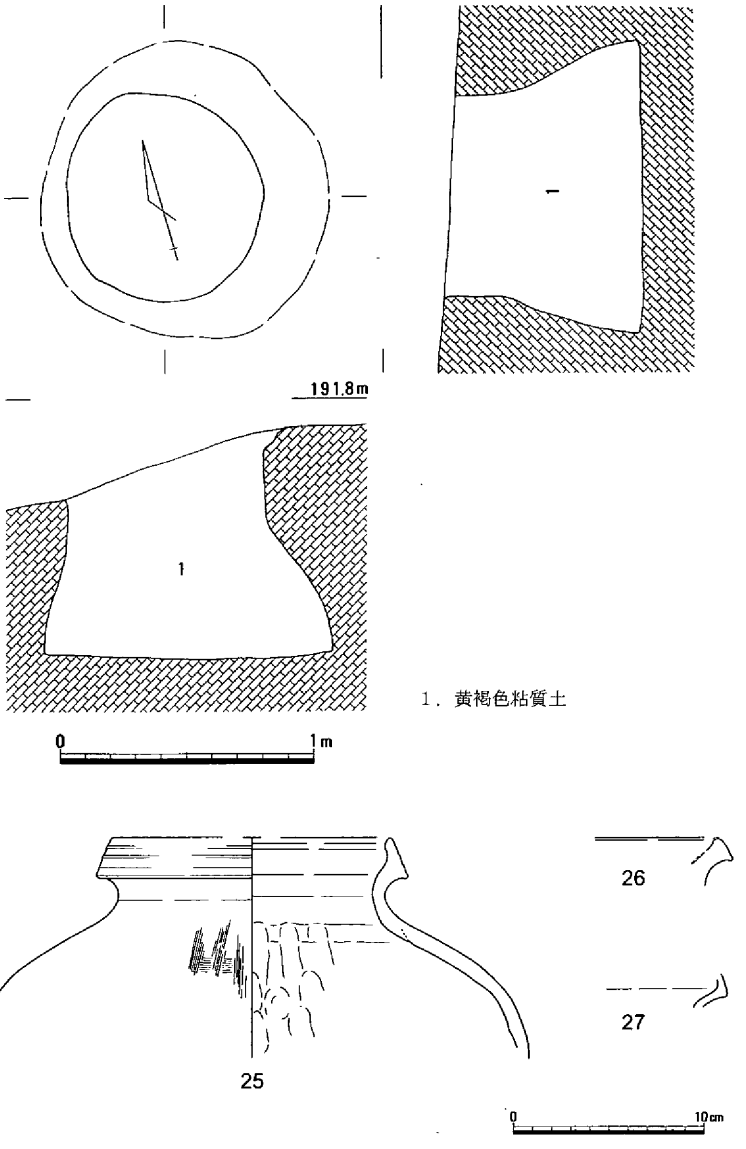
南地点の西斜面南端で、土壙４の東0.4m、土壙17の北東２ｍに位置する。標高191.6m付近で検出

した。平面形は、上面で直径80cm、底面で直径113cmの円形を呈し、検出面からの深さ91cmを測る。壁面は検出面から40cmまでは直立し、それより下方は膨らみを持って袋状に広がり底面にいたる。埋土は黄褐色の粘質土が堆積している。埋土からは甕**25**～**27**が出土しており、これらによりこの袋状土壙の時期は、弥生後期後半と考えられる。

（４）土壙

土壙５（第20図）

北地点頂部の東斜面の標高200.8m付近に位置する平面楕円形の土壙である。長さ84.5cm・幅51.5cm、検出面からの深さ10.2cmを測り、土壙墓１を切っている。底面は平坦で水平であり、壁面の立ち上がりはやや緩い。底部から甕**28**と高杯**29**が出土している。両者とも保存状態が悪く、細片化のため接合不能であったが、甕の口縁に高杯の杯部を合わせた土器棺の可能性もある。甕**28**は「く」の字に曲がる頸部を持ち、口縁端部の拡張はあまり見られない。高杯**29**は杯部底部に円盤充塡を施しており、口縁端部はわずかに内側に拡張する。これらの土器の特徴から土壙５の時期は弥生後期前葉と考えられる。



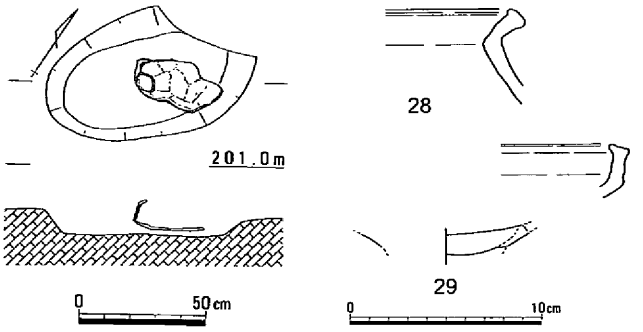
第19図　袋状土壙１（１/30）・出土遺物（１/４）

土壙６（第21図）

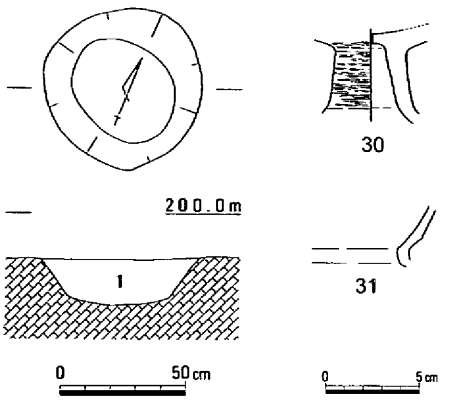
北地点の東斜面、土壙墓２の西0.3mの地点、標高199.8m付近に位置する。平面形は円形を呈し、直径62cm、検出面からの深さ18cmを測る。底面は中央がややくぼみ、壁面の立ち上がりはやや緩い。埋土は黄灰褐色土である。埋土からは高杯の脚柱部**30**と鼓形器台の小破片**31**が出土している。この土壙の時期はこれらの土器から弥生後期後半と考えられる。

土壙７（第22図）

北地点頂部の西斜面、標高201.2m付近に位置する。平面形は不整円形を底部では隅丸方形を呈し、上面で長さ93cm・幅66cm、検出面からの深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦でやや東側が浅く、壁面の立ち上がりは東側でやや緩い。埋土は暗灰褐色土である。埋土から土器が出土していないので時期の決定にはいたらないが、周囲の遺構の時期から弥生後期と考えられる。

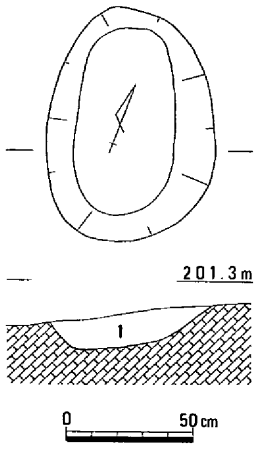


第20図　土壙５（１/30）・出土遺物（１/４）



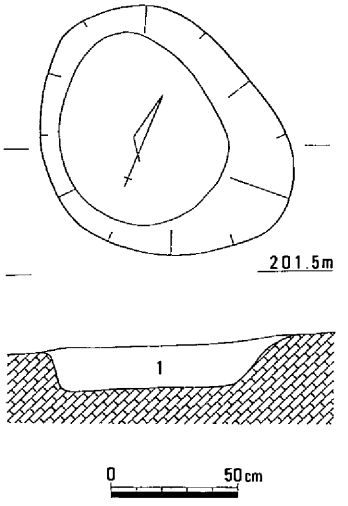
１．黄灰褐色土

第21図　土壙６（１/30）・出土遺物（１/４）



１．暗灰褐色土

第22図　土壙７（１/30）



１．黄灰褐色土

第23図　土壙８（１/30）

土壙８（第23図）

北地点頂部の東斜面、標高201.2m付近に位置する不整円形の土壙である。上面で全長105cm・幅66cm、検出面からの深さ16.5cmを測り、埋土には黄灰褐色土が堆積している。底部は平坦でほぼ水平である。壁面は西側で垂直に近く立ち上がり、東側で緩い。埋土からの土器は出土していないが、周囲の遺構の時期から弥生後期と思われる。

土壙９（第24図）

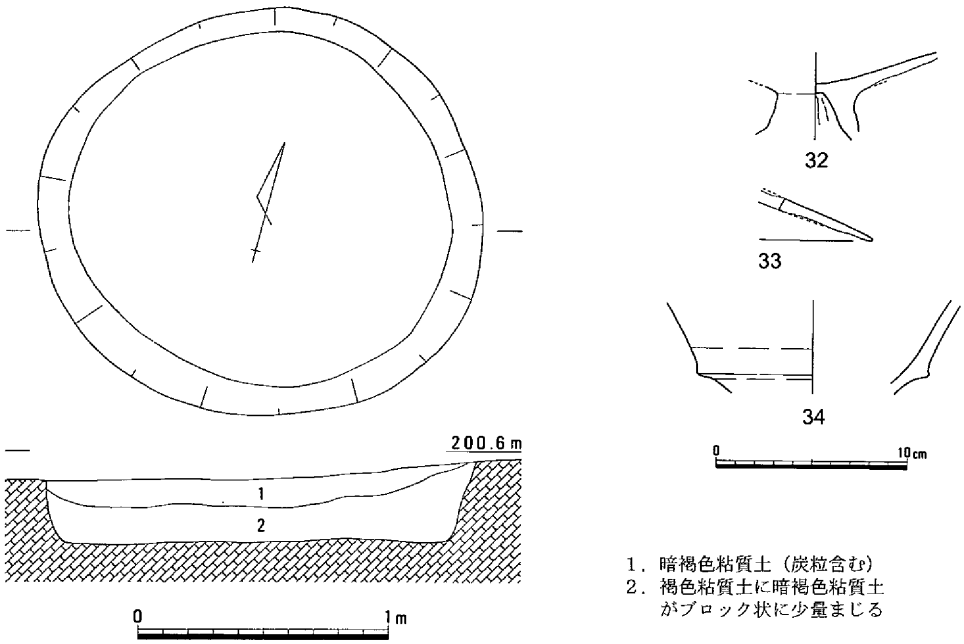
北地点頂部東斜面に位置する平面形円形の土壙である。標高200.6m付近にあり、直径176cm、検出面からの深さ30.5cmを測る。底部は平坦でほぼ水平であるが、やや東側で深い。壁面の立ち上がりはきつく垂直に近い。埋土は暗褐色の粘質土・褐色粘質土が堆積している。出土遺物として高杯**32**・**33**、鼓形器台**34**などがある。高杯**32**は杯部及び脚部の大半を欠くが、短脚の高杯である。これらによりこの土壙の時期は弥生後期後半と考えられる。

土壙10（第25図）

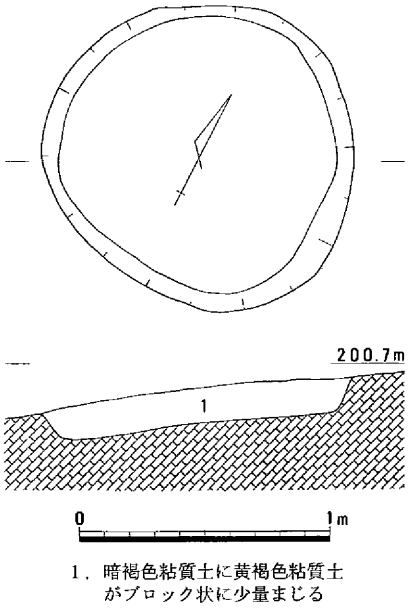
北地点頂部の東斜面、標高200.6m付近で土壙９の西約２ｍに位置する。平面形は不整円形を呈し、長径124cm・短径118cm、検出面からの深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦ではあるが、中央が気持ち高く西に低くなっている。壁面の立ち上がりはややきつい。埋土は、暗褐色の粘質土に黄褐色の粘質土がブロック状に混ざって堆積している。土器等の遺物が出土していないが、この土壙の時期は周囲の遺構から弥生後期と思われる。

土壙11（第26図）

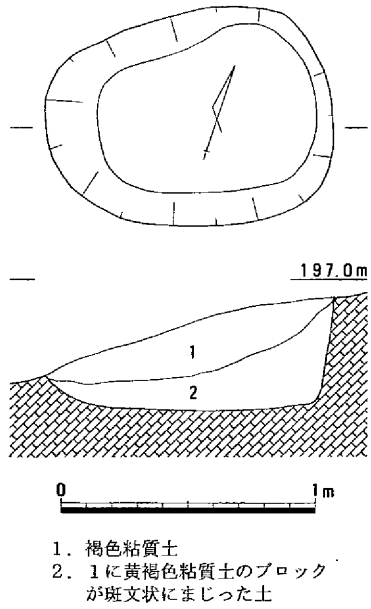
北地点西斜面の中腹、標高196m付近に位置し、平面形は上面で隅丸の長方形に近い形の土壙である。上面で長さ112.5cm・幅85.5cm、検出面からの深さ41.8cmを測る。壁面の立ち上がりは東できつく西で



第24図　土壙９（１/30）・出土遺物（１/４）



第25図　土壙10（１/30）

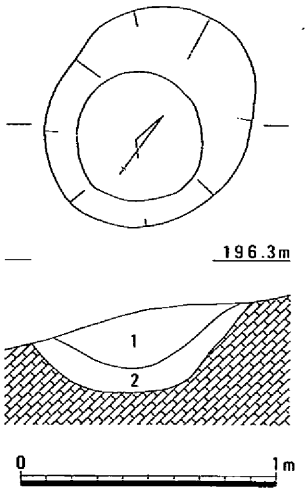


第26図　土壙11（１/30）

緩い。底面は平坦でほぼ水平である。埋土は褐色の粘質土を主体として、下層ではこれに黄褐色粘質土のブロックが混ざる。土器等の遺物が出土していないので、この土壙の時期の確定にはいたらない。

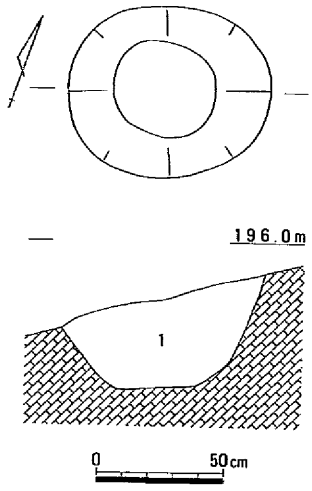
土壙12（第27図）

北地点西斜面の中腹、標高196mあたり、土壙11の南３ｍ土壙13の南東3.2mに位置する。平面形は



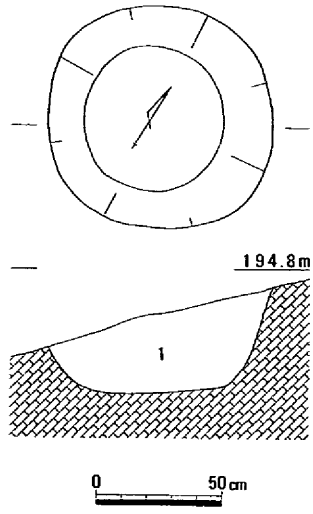
1．暗褐色粘質土に黄褐色土が斑文状にまじった土
2．褐色粘質土

第27図　土壙12（1/30）



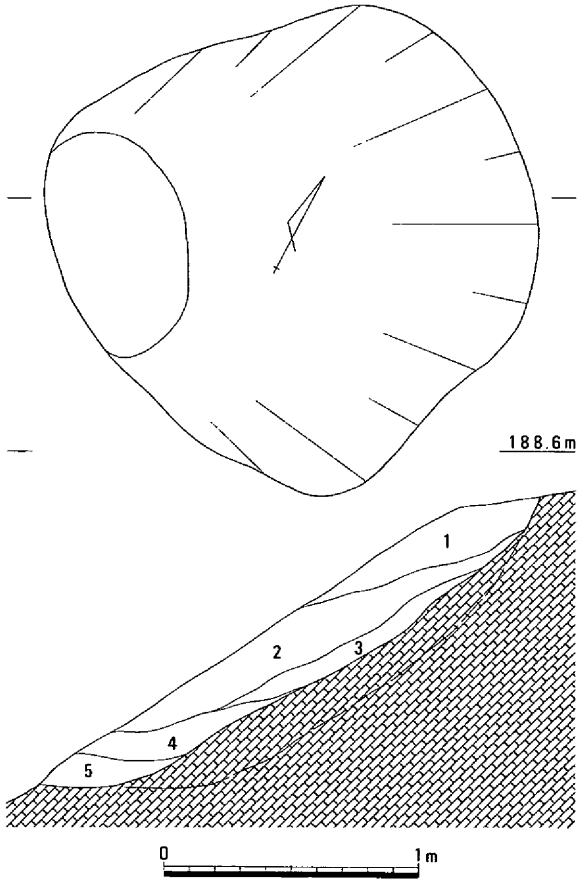
1．褐色粘質土
（炭粒含む、締まりなし）

第28図　土壙13（1/30）



1．褐色粘質土

第29図　土壙14（1/30）



1．黄褐色粘質土に褐色粘質土が斑文状に少量まじった土
2．黒褐色粘質土に暗褐色粘質土が斑文状にまじった土
3．褐色粘質土
4．褐色粘質土と黄褐色粘質土が斑文状にまじった土
5．褐色粘質土

第30図　土壙15（1/30）

上面で楕円形、底面で円形の土壙で、底部からの立ち上がりはやや緩い。上面で長さ92.1cm・幅76.3cm、検出面からの深さ32.1cmを測る。埋土は下層から褐色の粘質土・暗褐色粘質土に黄褐色土が混ざった土が堆積している。土器等の遺物が出土していないので、この土壙の時期は不明である。

土壙13（第28図）

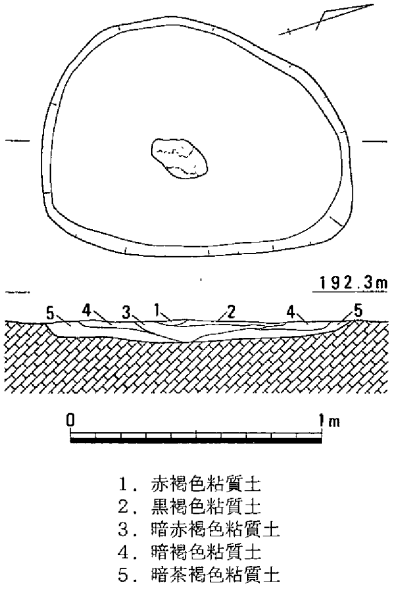
北地点西斜面の中腹の標高195.8mあたり、土壙11の西2.8mに位置する。平面形は楕円形の土壙で、上面で長さ79cm・幅68cm、検出面からの深さ46cmを測る。土器等の遺物が出土していないので、時期の確定にはいたらない。

土壙14（第29図）

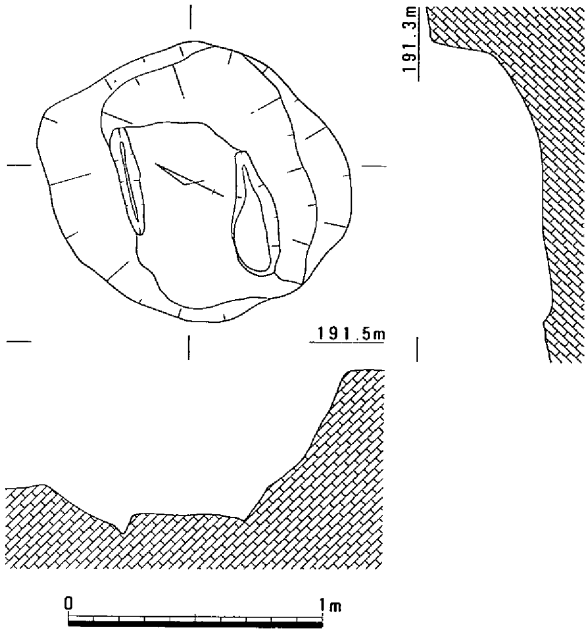
北地点西斜面の中腹、標高194.7mあたりに位置する。平面形は隅丸方形の土壙で、上面で長さ89cm・幅87cm、検出面からの深さ42.5cmを測る。土器等の遺物が出土しておらず、この土壙の時期は不明である。

土壙15（第30図）

北地点西斜面の下端、標高188.4mあたりに位置する。斜面により大きく削平を受けているため詳細は不明であるが、平面形は不整円形で断面形はすり鉢形を呈する大形の土壙と思われる。上面で長さ192.5cm・幅195cm、検出面からの深さ115cmを、



第31図　土壙16（１/30）

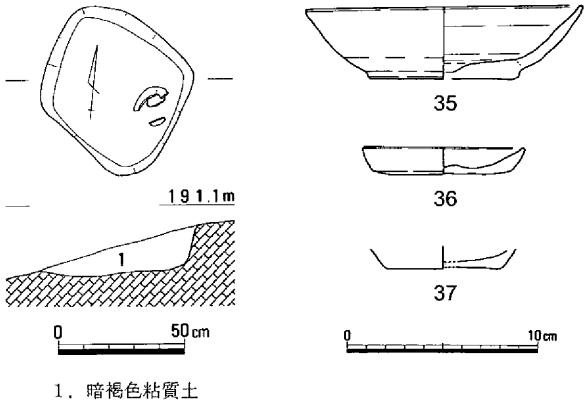


第32図　土壙17（１/30）

底面で長さ90cm・幅52cmを測る。埋土は褐色の粘質土を主体とし、上層では黒褐色粘質土・黄褐色粘質土で堆積している。土器等の遺物が出土していないので、この土壙の時期の確定にはいたらない。

土壙16（第31図）

南地点西斜面の中腹付近、標高192.2mあたりで、土壙３の南0.25mに位置する。平面形は不整な四角形を呈し、上面で長さ122cm・幅96cm、検出面からの深さ9.5cmを測る。埋土は下層から暗茶褐色粘質土・暗褐色粘質土・暗赤褐色粘質土・黒褐色粘質土・赤褐色粘質土の順に堆積している。土器等の遺物が出土しておらず、この土壙の時期は不明である。



第33図　土壙18（１/30）・出土遺物（１/４）

土壙17（第32図）

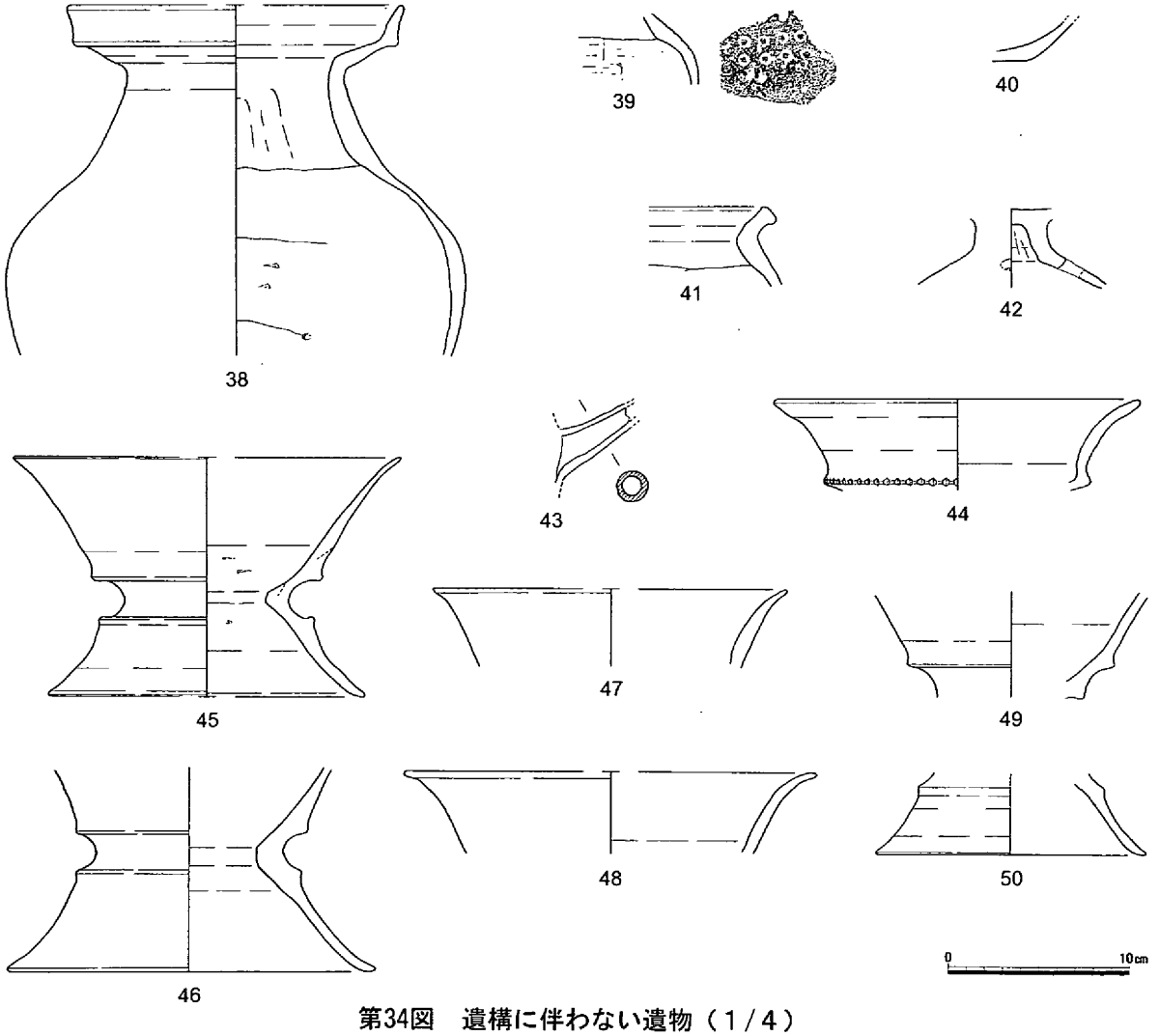
南地点の南西端、標高191.3mあたりに位置する。平面形は不整円形の土壙で、上面で長さ117cm・幅110cm、検出面からの深さ61cmを測る。底面の北と南両側に細い溝状のくぼみを有する。埋土は暗褐色粘質土が堆積していた。土器等の出土遺物がなく、この土壙の時期の確定にはいたらない。

土壙18（第33図）

北地点西斜面の下端、標高190mあたりに位置する。平面形は方形の土壙で、上面で長さ56cm・幅53cm、検出面からの深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、東辺よりで土師質の椀35と小皿36・37が出土した。椀35は口径14.5cm、器高４cmで、底部外面に回転へら起こし痕跡が残る。小皿37は口径8.4cm、器高1.5cmで、底部外面は回転へら切り痕跡がある。この土壙の時期は鎌倉時代前半と考えられる。

第３節　遺構に伴わない遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない土器は（第34図）、近現代の物を除くと、北地点の頂部付近で出土したものである。前述のとおり、その大半は土壙墓２周辺を検出時に出土したものである。土壙墓１・３や周囲の土壙からは土器の出土量が少ないことからすると、多くは土壙墓２に伴う可能性が高いのではないかと思われる。出土遺物としては、壺・甕・高杯・注口土器・器台・鼓形器台・砥石（図版８）などが出土しており、器台ないし鼓形器台の口縁・脚端部の破片が多い。土器は総じて表面の残り具合が悪く、調整が観察できないものが大半を占める。38の壺は胴部下半を欠く。復元口径18cmを測り、胎土は２mm以下の砂粒を含みにぶい黄橙色を呈する。39は壺の肩口の破片で、円形のスタンプ文が２列施されている。42は短脚高杯の脚柱部からすそ部にかけての破片で、外面に赤色顔料が塗られている。44は器台の口縁部の破片で、屈曲部に刻み目を施している。また、赤色顔料がわずかながら内外面に観察できる。45～50は鼓形器台で、この内45・47・48・49には内面または外面に赤色顔料が観察できる。45は口縁部が１/６以下脚端部が１/３以下の残存で、復元口径20.8cm・脚端径17cm・器高13.1cmを測る。このほか、砥石Ｓ１が出土しているが、時期は不明である。



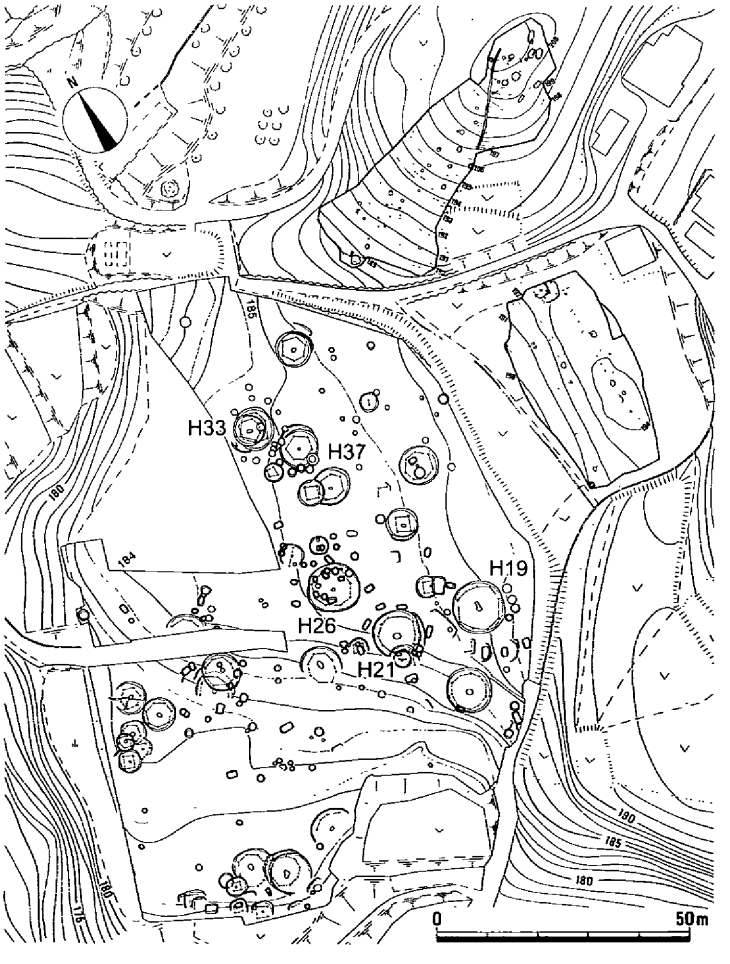
第34図　遺構に伴わない遺物（１/４）

第４章　まとめ

旦山遺跡では、今回の調査で弥生時代の竪穴住居２軒、袋状土壙１基、土壙墓５基を確認し、平成８年度の全体調査では同時期の竪穴住居37軒、建て替えを含めれば109軒、土壙160基を検出している。ここでは、土器が伴わなかったり伴っていたとしても細片のためなどにより、必ずしもすべての遺構に対して明確な時期決定ができかねる状況にあるので、平面的位置関係について気づいた点を概括的に述べたい。

まず、竪穴住居と段状遺構の営まれる高さに時期的な違いがあるか見ていきたい。弥生時代中期末ではＨ１・Ｈ４・Ｓ５が標高180～182.5mに、後期前半ではＨ５・H17・Ｓ１・Ｓ10が180～186.5mに、後期中葉ではＨ９・H10・H11・H16・H18・H22・Ｓ12・Ｓ16が180.5～185.5mに、後期後葉Ｈ６・H23・H25・H26・H27・H28・H29・H30・H31・H34・H35・H36・H37が184.5～186mに、住１・住２が192.5～193mに位置する[1]。おおむね185mを境として時期的に大きく分かれると捉えられよう。すなわち、185mより下方に中期末から後期中葉の住居や段状遺構が占地し、後期後葉になってそれより上方へ住居が営まれるようになるようだ。では、袋状土壙についてもこの傾向が言えるか見てみよう。袋状土壙では伴う土器が細片のため明確な時期を示せる物が少ないが、185mを境として調査区の北東側に中期末２基・後期前葉５基・後期中葉12基・後期後葉13基、南西側に中期末４基・後期前葉７基・後期中葉３基・後期後葉０基となって、竪穴住居と段状遺構でみられた傾向は袋状土壙についても言えそうである。

次に、竪穴住居と袋状土壙及び方形土壙の平面的位置関係について見ていきたい。160基の土壙のうち、いくつかのものについては大型の竪穴住居の周りを弧状ないし環状に囲むように配置されていると考えられるものが存在する。H19・H21・H26・H33・H37の周囲で観察される。H19は４度の建て替えが行われている後期中葉から後葉の住居で、直径10.44mと本遺跡中最大で、鉄器・鉄滓が出土している。袋状土壙は東側で４基、西側で２基（やや北に所在する方形土壙を入れると３基）



第35図　弥生時代遺構配置状況（１/1,500）

が直径約13.5mの同心円上に所在する。H21は４度の建て替えが行われている後期前葉から中葉の住居で、直径9.4mと本遺跡中３番目の大きさである。この住居の北東側で方形土壙４基が長軸を直径約12.5mの円弧に沿わすように配置されている。H26は６度の建て替えが行われている後期後葉の住居で、直径10.4mと本遺跡中２番目の大きさである。袋状土壙が北側に４ないし５基が直径約14mの円弧状に所在する。H33は６度の建て替えが行われている後期中葉から後葉の住居で、直径8.5mである。袋状土壙は９基が直径約12mの同心円上に配置されている。H37は７度の建て替えが行われている後期後葉の住居で、直径7.8mである。この住居の南西側に袋状土壙６ないし８基が直径約11mの円弧状に所在する。

このように見ると、旦山遺跡では、集落の中心となる大型で数度の建て替えが行われた住居の周囲に、直径11～14mの円周上に袋状土壙や方形土壙が配置されたといえる。

同様の例はいくつかの遺跡でも見られる。岡山市奥坂遺跡では住居との直接的位置関係は見られないが、後期後半～古墳時代前期初頭の袋状土壙９基が直径約17.5mの環状に配置され、袋状土壙の機能や集落内での占地が住居との共存関係を保ちつつ継続されたと指摘されている(2)。津山市一貫東遺跡では、後期前葉から前半の貯蔵穴35・36・37・38・83が、後期前葉で直径8.5mの住居の肩を切って円弧状に配置されている(3)。津山市荒神峪遺跡では、土壙27・28・29・30・31・32・34が直径約10.5mの円周上に配置されている(4)。このうち、土壙27・28・31・32が貯蔵穴と考えれている。時期はいずれの土壙からも土器が出土していないため不明であるが、土壙27は後期後半の住居４を切っている。

以上のように、袋状土壙（貯蔵穴）や方形土壙は、旦山遺跡や一貫東遺跡のように住居の周囲に配置される場合と、奥坂遺跡や荒神峪遺跡のように単独で配置される場合がある。いずれも直径10～17mの円弧状に配置され、配置される住居は大型の住居であるのが特徴と言えよう。配置された土壙の時期は土器が伴うものばかりとは言えず、住居の建て替えの対応関係など必ずしも明確には決めがたい。また、奥坂遺跡のように後期後半から古墳時代前期初頭まで、長期にわたる場合もある。円形に配置される土壙群の管理主体について、住居の周囲に配置される場合は住居単位で、単独で配置される場合は集落単位と考えられなくもないが、さらに整理検討が必要でありこのような状況で言及するには時期が早すぎるように思える。いずれ稿をあらためたい。　（扇崎）

註

（１）アルファベットを付した番号は平成８年度調査分を、漢字を付した番号は今回報告分を示し、Hは竪穴住居、Ｓは段状遺構を表す。

（２）高畑知功「第５章第３節　まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53』岡山県教育委員会　1983年

（３）湊哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会　1992年

（４）小郷利幸「荒神峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集』津山市教育委員会　1999年

１．調査地遠景（西から）

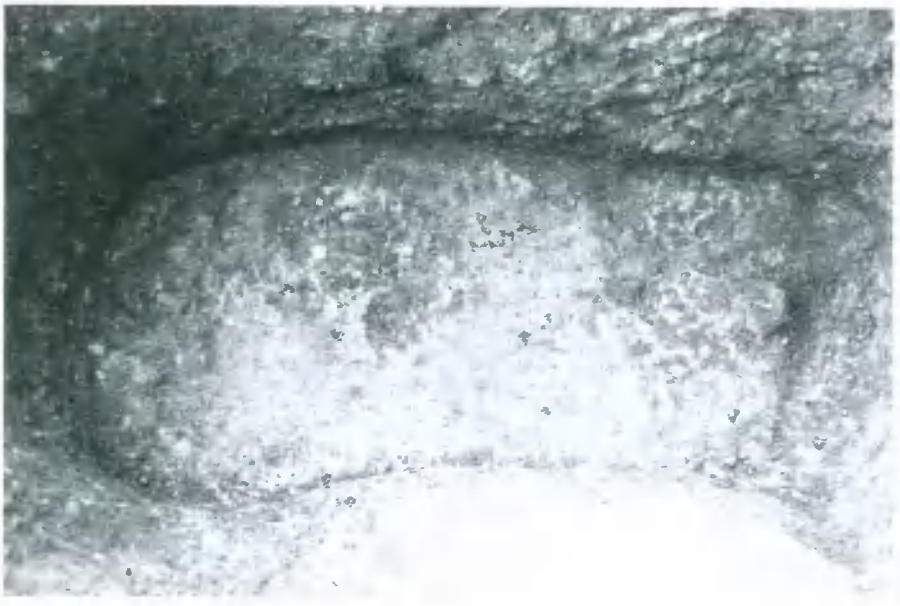
２．調査区全景（南から）

３．土壙２（西から）

図版２

１．土壙４（西から）

２．竪穴住居１・２
（西から）



３．土壙墓２（南から）

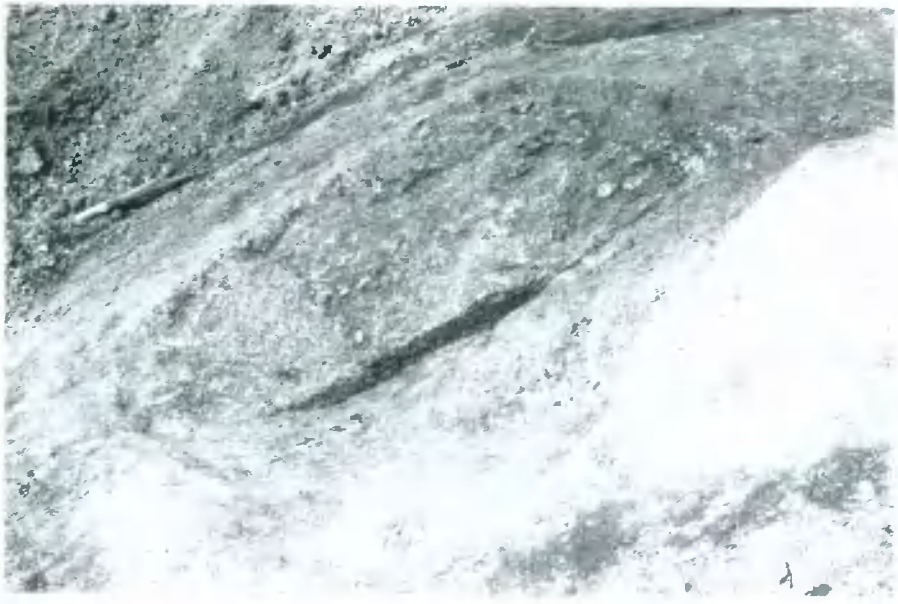
１．土壙墓３（南から）

２．袋状土壙１（西から）

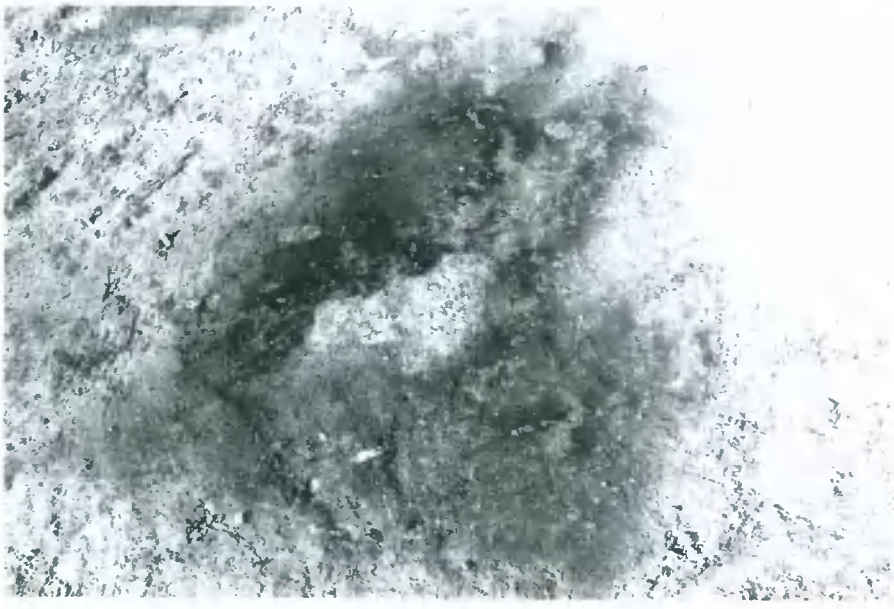
３．土壙５（南から）

図版４

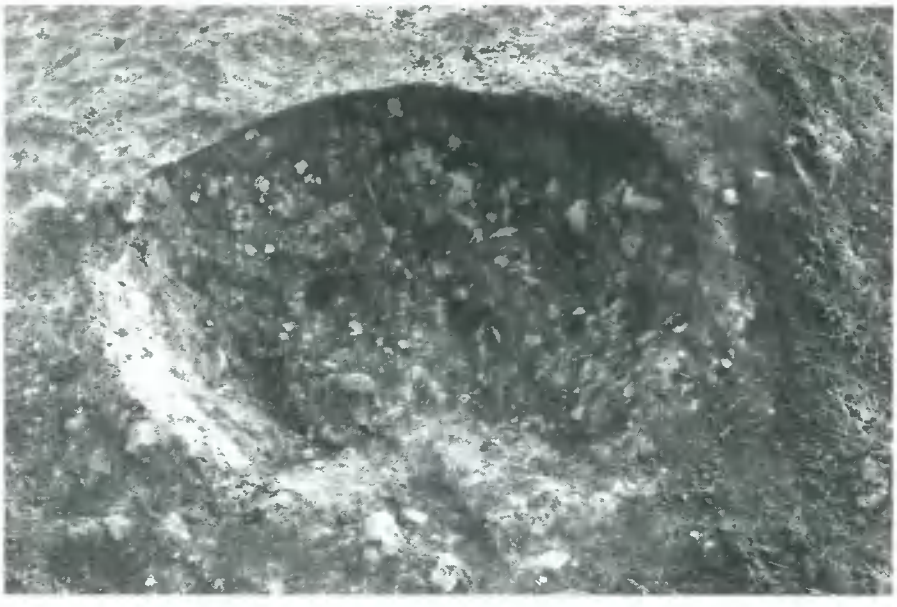
１．土壙９（南から）



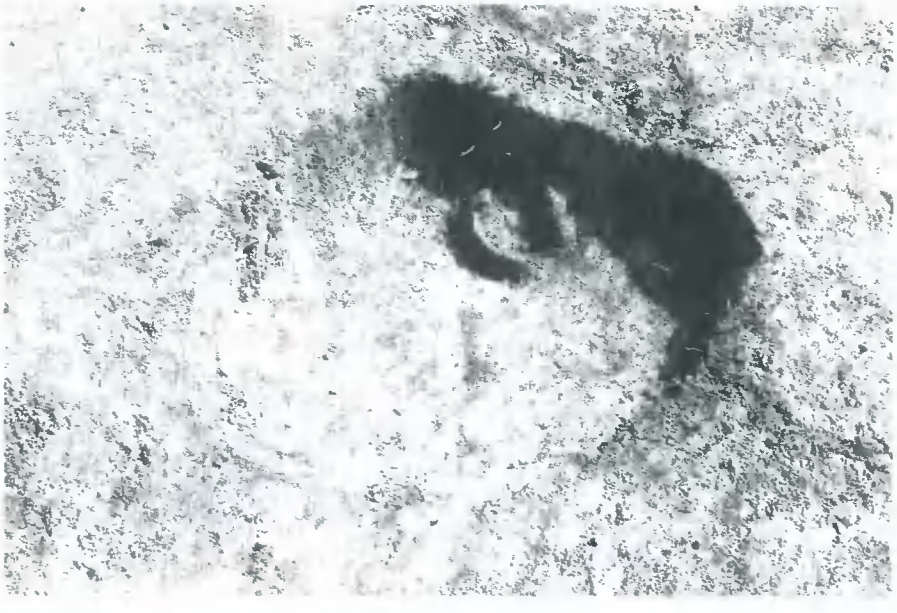
２．土壙15（南から）



３．土壙16（西から）



１．土壙17（西から）



２．土壙18（北から）

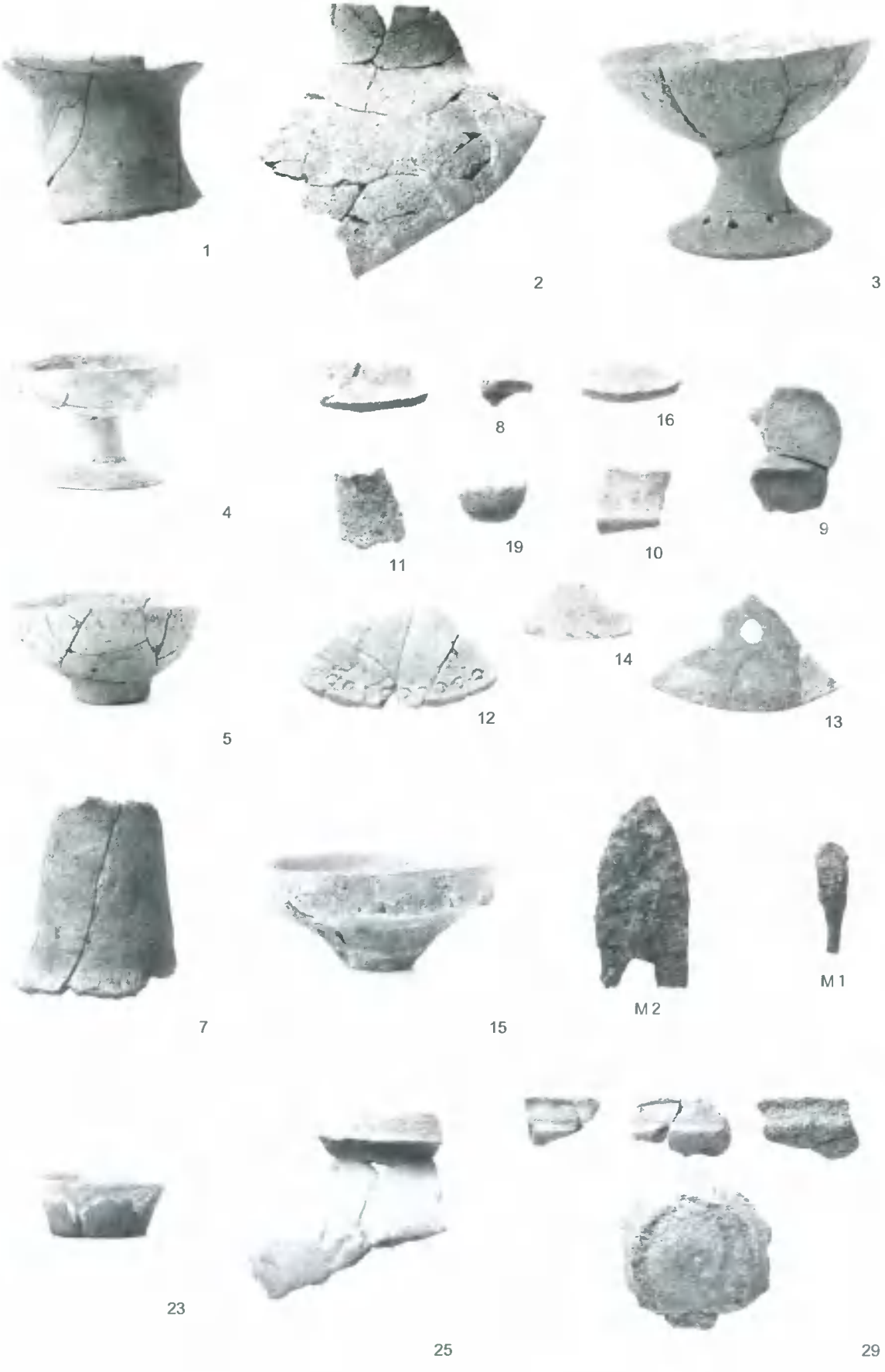
３．土壙墓調査状況
（東から）

図版６

１．竪穴住居調査状況
（南から）

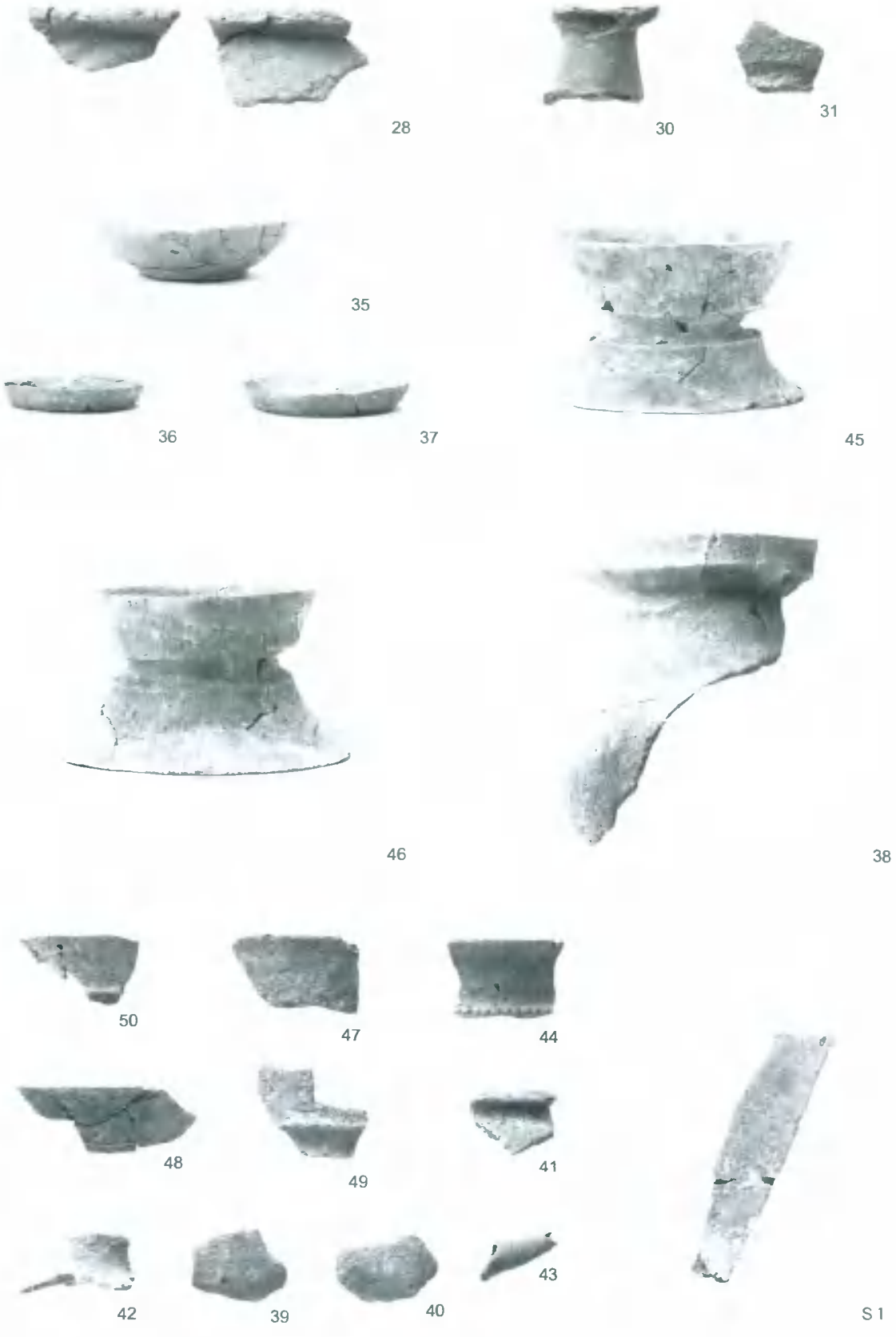
２．文化課の応援

３．雪の旦山遺跡
（西から）



出土遺物（１）

図版８



出土遺物（２）

報告書抄録

ふりがな	だんやまいせき
書名	旦山遺跡
副書名	岡山県北流通センター造成工事(南区域)に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	2
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	161
編著者名	扇崎由・松本和男・福本明
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL 086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－8570　岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL 086－224－2111
発行年	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
旦山遺跡 (だんやまいせき)	岡山県 (おかやまけん) 真庭郡 (まにわぐん) 久世町 (くせちょう) 中原 (なかばら)	33584	Ⅰ－47	35°4′22″	133°47′10″	2000.1.17～1.27 2000.2.28～3.7	1,550	岡山県北流通センター地滑り防災工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旦山遺跡	集落・墓	縄文時代 弥生時代 中世	落とし穴・竪穴住居・土壙墓・袋状土壙・土壙	弥生土器・土師器・鉄鏃	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 161

旦山遺跡２

岡山県北流通センター造成工事(南区域)に伴う埋蔵文化財発掘調査

2001年３月29日　印刷
2001年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
〒701-0136　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
〒700-8570　岡山市内山下2－4－6
印　刷　ワシュウ印刷株式会社
岡山市当新田381－3